

転生勇者と中二姫 ち
なみに俺は一般人

?~Rea~

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代日本、俺の友人は転生した元勇者であった。勇者曰く、同じ高校のマドンナは転生前に仕えていた姫様と同じ顔。接触してみるも、その人は転生者を偽るが、俺はただの中二病だと気づいたのであった。

よくある、転生ものではありませんが、元勇者が現代に転生したら？ というものです。

目次

夏休み、夏祭り「前編」

元勇者と中二病	1
そうだ、部活動を作ろう	15
部活動を始めました	23
後輩は転生者（笑）	33
元勇者と一般ピーポー？	42
体育祭の準備とともに	55
俺の日常	66
体育祭とボヤ騒ぎ	79
BlueなBrave	98
異世界の事情をこの世界に持ち込むな！	107
初めての犠牲者	118

元勇者と中二病

「転生」という単語を聞いたことがあるだろうか。「転生」、それはおそらく、輪廻転生から来ており、死んであの世に還った靈魂が、この世に何度も生まれ変わってくることを言う。ヒンドウ教や仏教などインド哲学・東洋思想だ。

そんな「転生」。多宗教国家であり、無宗教の人間もいる日本においては、信じているものも多くはないだろう。

近代の日本においては、小説やゲーム。いわゆる二次元の世界においては人気のジャンルと言っても過言ではない。

実際にはありえない。

日本人ならほとんどの人間が口を揃えるだろう。俺もその一人だった。

「やあ、涼也。今日もいい朝だね」

この男に会うまでは……

登校中、声をかけてきた、地毛が茶髪で、凛々しく、爽やかな男。俺と同じ細身であるというのに、どこか筋肉質な部分も見受けられる。いわゆるイケメンというやつである。

「よお、勇者様」

そう、返事をする。他人が聞いたら、おかしな呼び方であるが、あながち間違いではない。鈴童雨（リンドウ アメ）、彼は転生者である。

なんでも、彼は転生前は剣と魔法の世界で、勇者と呼ばれていたらしい。もちろん、俺も最初は信じた訳では無い。だが、信じざるを得なかった事件がある。だが、それはここで語るべきではないだろう。

「その呼び方はやめてくれないかな。民衆がそう言い出しただけだし、この世界では意味をなさない」

苦笑いをする雨。前の世界に未練があるのか、少しだけ寂しそうな顔をする。

「前の世界が愛おしいか？」

「愛おしくない。あの世界で僕がやるべきことはやった。だけど、あの世界が僕の死後、どうなったのか、という気になっている。婚約者も置いてきてしまったしね……」

「婚約者？」

それは初耳である。今まで、いろんな話を聞いてきたが、婚約者がいたなんて知らなかった。

「ああ、言ってなかったっけ」

「聞いたことないぞ。勇者って言われてたくらいだから、お姫様とでも婚約してたのか？」

王命か何かで少年、または青年が呼び出され、平和のために戦いの世界に駆り出される。その見返りとして、お姫様を娶ることができる。小説やゲームではよくあるパターンである。

「君は本当に感がいいんだね……」

雨は小さく溜息をつく。どうやら、正解のようである。

「ほとんど当てずっぽうだ。どちらかと言えば、日本のサブカル文化の賜物だな」

「本当にこの世界は凄いな。こんな魔法もないような世界で、他の世界のことを想像で書いてるなんて」

感心したように、彼は言う。

「この世界の人間は暇なんだよ。だから、想像ができる。お前がいた世界と違って平和だからな」

「違うない」

雨は笑った。彼が勇者であった世界では人間と魔物の戦争が起こっていた。その戦争を終わらせるため、彼は勇者になった。そして、最後に彼は命と引き換えに世界の平和を手に入れた。

「そのお姫様って、どんな人だったんだ？」

興味本位で聞いてみる。

「そうだね……素晴らしい人だったよ。僕なんかにはもったいないくらいにね……」

その表情は愛しい人を思い浮かべるような、そして切ないものであった。前の世界が愛おしくないというのは、嘘。そんなことは俺にもわかるくらいに……

「可愛かったのか？」

「やっぱりそこなんだね。ああ、綺麗だったよ」

彼は笑う。男として気になるのはやはりそこなのである。

「うちのマドンナとどっちが可愛んだろうな？」

「マドンナ？」

「お前、そういうのには疎いよな。うちの高校で可愛さナンバーワンって言われてる神崎玲奈だよ。隣のクラスだぞ？」

これは、クラスメイトから聞いた話である。俺も何度か見かけたことがあったが、なかなか可愛い。いや可愛いと言うより綺麗と言った方が正しいだろう。その身は細く、白く、麗しい。大和撫子という単語がまさに似つかわしい生徒であった。

「そんな御仁もいるんだね。うん、ぜひ見て見たい」

こういうのにはあまり興味を持っていないと思っていたのだが、雨もやっぱり男のよ

うである。

「んじや、昼休みにでも見に行くか」

「楽しみにしているよ」

高校に着き、それぞれの席に座る。雨が席に着いた瞬間、雨の周りは女子でいっぱいになる。イケメンの性と言うものなのだろうか。雨は性格がいいこともあって、女子の人氣が高い。一部の女子は雨のことを王子と言っているんだとかなんとか。

羨ましい限りである。

「雨、飯行くぞー」

「ああ、分かった。みんなごめんね。今日は先約があるんだ」

昼休み、雨を食事に誘う。彼の周りには女子集りが出来ていたが、雨は食事の誘いに断りを入れ、こちらに来る。

女子達の目が怖い怖い。さっさと退散することにする。

そして、屋上。俺たちのお目当てである神崎玲奈はその友人とよく屋上で昼食を取っているとのこと。俺はだいたいほかの友人と学食で昼食を取っているから、屋上に来るのは相当久しぶりである。

「お、あれだな」

神崎玲奈を見つけ、雨に教える。

「なっ!？」

神崎玲奈を見た瞬間、雨は口を開けて固まった。なるほど、イケメンが固まるところ
いう感じになるのか。

「ん? どした?」

急にどうしたのだろうか。持病発作でも起こしたのだろうか。雨が持病持ちなんて
聞いたことないけど。

「……ちよつと待っててくれ」

深刻そうな顔をする雨。そして、彼の足は神崎玲奈の方に向いていた。

「あ、おい……」

俺は引き留めようとするが、歩いていった。そして、少し何かを話したかと思うと
戻ってくる。

「何話してきたんだ?」

「少し放課後に話したいと伝えただけだよ」

「ふうん。告白でもするのか?」

「告白か……そうだね、ある意味告白かもしれないね」

その顔は深刻だった。少しだけ、嬉しそうに見えたのは俺の気のせいなのかもしれない

い。

放課後。

「なあ、俺がついてきてもよかつたのかよ？」

「むしろ、涼也がいてくれた方がありがたい。失敗してくれたらフオロー頼むよ」

失敗？ 告白の？ こいつは何を言い出すのだろうか。失敗したら慰めでもしたらいいのか？

「お前がいろいろ言うならいいけどさ」

とりあえず、雨に歩いていく。神崎玲奈は夕日をバックにひとり、佇んでいた。その姿はまさに美の一言であった。

扉が空いた音に気づいたのか、彼女はこちらを向く。周りには野次馬のひとりもいない。学園の王子がマドンナに告白する、というビッグイベントであるのにも関わらず、である。

雨は神崎玲奈のもとへ歩いていく。そして、少しの距離を開けて跪いた。

……………はっ!? 何やってんだあいつ!?

「失礼を承知でお聞き致します。貴方は、レーナ姫なのではないですか？」

神崎玲奈は啞然としている。

そりやそうだ。誰でも跪かれてお姫様ですか？　なんて聞かれればそうなる。

「お、おまつ!!　何言ってるんだ!?!」

「涼也、今朝言った姫だけど、彼女に似すぎている。直感だが、彼は姫だと思った。だから、僕は止まれなかった……」

なるほど。昼休み、こいつが固まったのはそういう理由か。しかし、そのお姫様とやらが、この世界に転生してくるというのはありえる話なのだろうか。転生ということ自体、奇跡に近いというのだ。確かに、雨はこの世界に転生してきた。それは、ほかの転生者もいるかもしれない。だけど、確率論的には相当低いはずである。ただ、似ていると言っただけで、転生者と断定するには早すぎる。

雨もそれをわかっているはずなのだが、彼は止まらなかった。止められなかったのだらう。

フオローしてくれというのは、もし違った場合、誤魔化してくれということだらう。さて、どう誤魔化したものか……

「顔を上げてください。鈴童雨さん……いいえ、レイン……」

色々考えていると、神崎玲奈は口を開いた。レイン。その名前には聞き覚えがあった。鈴童雨の前世の名前だ。

彼女は雨に微笑んだ。しかし、その笑みからは雨とは何か違うものを感じた。

「貴方は姫なのですか……?」

「ええ、私はレーナ。あなたが現れるのをお待ちしました」

神崎玲奈はとんでもないことを暴露した。開いた口が塞がらないというのは、こういうことなのだろうか。

「やはり、姫だったのですね! あなたを置いていったこと、罪の滅ぼし用がありません……」

跪いたまま、顔を下げた雨。まさに、姫とそれに仕える者の絵であった。

「気にしないでください。あなたはすべきことを為した。それだけなんですから……」

「……ありがとうございます。しかしこの世界であなたとまた会えるとは……僕が死んだ後、あの世界はどうなったのですか? 魔物達とは結界を隔てたため、そちらに行くことは無かったと思います」

「……滅びました」

雨は絶句した。命を賭して、手にした平和がいとも簡単に崩れたと告げられたのだ。当たり前だろう。

「滅びたんです。神によって人間は滅ぼされました。世界を変えた人間が許せたかったのでしょうか」

「そう……ですか……それじゃあ、僕のやった事は……」

雨は涙を流す。

「無駄、ではなかった。そう思います。結局は滅びましたが、それまでは平和でしたから……貴方には感謝しきれません。そして、また会えたこと、とても嬉しいです」

「姫!!」

雨は神崎玲奈に抱きついた。我慢できなかったのであろう。愛おしく、もう会えないと思っていた人が目の前にいる。誰だつてそうなるのは当たり前だろう。きつと神崎玲奈も……

ん？ おかしい。普通、これは雨のことをしつかりと抱きしめるところだろう。しかし、神崎玲奈はそれをしておらずドギマギしているだけだ。婚約者で、交流もあったのなら、そういうこともあったはずだ。それなのに、彼女は違う。

さすがに、勇者よ……感極まりすぎではないだろうか……

「レイン……そろそろいいでしょうか……?」

「すみません……感情が昂つてしまい……」

雨は姫から離れる。

「許します。ところで、こちらでの能力は?」

「はい。こちらの世界ではmanaがほとんど枯渇しているため、向こうの世界と同じようなことはほとんど無理です。できることと言えば、これくらいです」

雨は人差し指を顔の前に出す。すると、人差し指の第二関節あたりから魔法陣が出て、指先からライターの火力ほどの炎が出る。

そう、これが俺がこいつを元勇者だと認めている理由の一つ。こんなこと、種もなしに常人ができるはずもない。

神崎玲奈は驚いていた。ありえない、という顔だ。魔力が枯渇している世界で魔法を使うということが、それだけ凄いということだろう。

「……さすがですね。この世界で魔法が使えるなんて……」

「ということ、姫は……」

「ダメですね。こちらでは使えないようです……」

「そうでしたか。しかし、私は姫の剣。どんな危険が来ようとも、あなたをお守りします」

再び跪く元勇者。

「この世界で危険って、そんなになんかと思うのだが……」

「そう、ありがとう。頼りにしていますね」

「それでは、僕はこれで失礼します。何かあれば、呼びつけてください。直ぐに駆けつけます」

「期待していますね」

そういうと、雨は立ち上がり、屋上から去っていった。俺もその後について行こうとする、急に腕が動かなくなった。

「ん？ どうしたんだ？」

原因はお姫様。腕を掴まれて、引き留められてしまっていた。

「ところで、貴方も転生者なんですか？」

「いや、俺はただの一般人だ」

かれこれ17年、ただの一般人として生きてきた。雨に剣術を教えて貰ったこともあつたが、凡人の域を出ない。

すると、姫は大きなため息を吐く。そして――

「ななな……なんなんですかあの人はっ!？」

神崎玲奈は声を上げた。

急にどうしたんだ、この人……

「なんなんだって、転生者だろ？ お姫様と同じで」

さつきまでの威厳はどこへやら。

「それに、さつきまで再会を喜んでたじゃないか」

「そういう設定でしょ!?! 魔法？ マジですか!?!」

神崎玲奈は完全にパニック状態だった。

「設定……？　おい、お前まさか……」

まさか、学園のマドンナの存在の神崎玲奈がそんな重病を患っているとは知らなかった。中二病やってたら、ほんとに元勇者が出てきたのだ。頭の処理が追いつかないのは仕方の無いことだろう。

「そうですよ！　なにか悪いんですか?!　せつかく仲間ができたと思っただのに……」
神崎玲奈は完全に開き直る。

なるほど、だから（仲間が）現れるのを待っていた。そういうことか。

「ま、まあほら、あいつ本物だけど、そういう中二的なことには乗っかってくると思うぜ？　お前のごとホントにお姫様だと思ってるらしいし」

一応助け船を出してみる。神崎玲奈からしてみれば、千載一遇のチャンスということに間違いはない。ただし、相手は中二病というわけではなく、本物の元勇者ではあるのだが……

「ま、まあ……そうですね……確かにその通りです……本物の元勇者と出会えるとは幸運でした!」

あかん、この子ダメな子や……

俺の中で神崎玲奈は学園のマドンナという位置から、残念なこと言う位置まで落ちていった。

「そういえば、私たちも魔法って使えるんでしょか？」

「どうだろうな？　勇者も言ってたけど、この世界はマナとやらがほとんどないらしい。まあ、雨が出来てるんだから、頑張れば出来るようになるんじゃないか？」

俺に関していえば、魔法の適正はある。ただ、やらない。努力したところで、勇者が使ったような魔法程度。あんなのならライターを使った方がよっぽどいい。

「そうですか……！」

あ、これ、絶対に教えをこようやつだ。

「んで、続けるのか？」

「当たり前です！　毒を食らわば皿まで……こんな好機を逃す訳には行きません！」

この世界で、別に姫を名乗っているからと言って命を狙われることはほとんどないし、勇者もいるからほとんど問題は無いだろう。本人がやりたいというなら、何も言うまい。

「あ、鈴童さんには内緒ですよ？」

人差し指を唇にあて、ウインクするその姿を可愛いと思ったのは致し方のないことであらう。

顔はいいのだから。

そうだ、部活動を作ろう

「部活を作りませんか？」

放課後、俺と雨のもとにやってきた、神崎玲奈。

「部活？ 拒否する」

全く意図が読み取れない。なぜ部活なんかを作らなければならぬのだろうか。俺には放課後を悠々自適に過ごすという大使があるのだ。

「涼也、話くらいは聞いてもいいんじゃないだろうか……？」

なぜかは分からないが、嫌な予感がする。あまり関わりたくはない。

「ちよつと……いいですか？」

「なんだよ？」

神崎に手招きされ、雨を置いて廊下に出る。雨ははてなマークを頭の上に浮かべているようだった。

「なんで拒否しちゃってるんですか!? 部活作りましょうよ！ お二人共、部活には入っていないと聞きましたよ!」

神崎は前のめりになっている。そこまでして部活を作りたいのだろうか。

「だから嫌って言うてんだろ。だいたい、なんで俺と雨なんだよ。お前、学校じゃ人気者だろ? 部活なんてすぐ作れるだろ」

俺だつて暇じゃないし、部活動に入っていないという訳では無い。帰宅部という最高の部活に入っているのだ。

「あなた達にししか頼めないから言うてるんです! ほら、例のアレですよ、アレ」
「ああ……あれね……」

つまり、こいつは中二病を発散する場所が欲しいということなのだろう。

「もう、バラしてしまえばいいじゃねえか」

「嫌ですよ! もう、冷たい目で見られるのは懲り懲りなんです!」

プルプルと震える神崎。一体過去に何があったのやら……

「それなら、中二病を卒業したらいいじゃないか……」

「そういう問題ではないのです! 今までは発散しようとしても1人でしかできなくて大変だったんです。こんな、チャンス逃す訳には行かないじゃないですか!!」

「あ、はい……」

なんか、すごい可哀想に思えてきたぞ……

「とうかよ、お前。部活を作るのはいいいけど、メンバーが俺を除くとお前と雨だろ? 絶対入部希望者が出てくると思うんだが?」

そう、俺はともかく、2人は学校の人気者である。そんなふたりが同じ部活にいては、入部希望者があとを立たなくなってしまうだろう。

「あ、そういうえば……どどど、どうしましょう!？」

なんていうか、うん。この子、すごく残念だ。

「諦めろ」

「嫌です!! せつかく、仲間以上のものを手に入れたんです。これが諦めきれますか!

それに……」

「それに?」

「私は一時の流れで嘘をついてしまいました。私が転生者で、元・雨さんの愛おしい人であつたと……今更、違うなんて言えないですから……」

言っていることは分からなくはない。だが――

「踏ん切りつかなくなってるだけだろ、お前」

「あははあ、バレちゃいました?」

開き直りやがりました。てへっ、と舌を出す神崎の姿は、正直可愛かった。

「勝手にしろ。俺は知らん」

「そんな!! 言ってくれたじゃないですか! 俺がお前の助けになるって!!!」

「言ってねえよ!!」

そんな記憶、どこにもない。勝手に記憶を捏造して欲しくないものだ。

「うう……涼也さん、意地悪です……」

神崎は涙目で俺を見る。

「悪かったな、こんな人間だよ。俺は」

「分かりました。でしたら、涼也さん意地悪された（遊ばれた）という噂を流します」

「んん……？　なんか、おかしくないか……？」

「ちよつと待て、そんな事されたら俺が死ぬ」

「おそらく、俺の学校でのスローライフが神崎ファンによって跡形もなく消されるだろう。」

「それが嫌なら手伝ってください」

「語尾にはハートでも付きそうさ。」

「この悪女が……」

「皆の為なら私は悪女にでも悪魔にでもなりましょう」

「聖女のような言い分。しかして、その実態は——

「いや、私利私欲だろ……」

「それで、どうするんですか？」

「分かったよ、手伝えばいいんだろ、手伝えば」

大きいため息をつく。なんか、ほんと変なのに絡まれてしまった。いや、正しくは絡んでしまったか……

過去の俺、雨を全力で止めるんだ!!!

「さて、雨さんも待つてますし戻りましょう」

「へいへい……」

人間、諦めることが肝心だろう……

俺達は教室に戻る。

「おや、話はもういいのかい？」

「はい。この部活を作る理由が正しいか、ということを涼也さんに聞いていました。結論として、正しいという返事を頂けたので、雨さんにも話しますね」

「なるほど。そういうことでしたら、お願いします」

変な誤解をされないための言い訳が上手いことで……

俺はジト目で神崎を見る。

「なるほど。つまり、この世界へと転生してきた者を集める場所を作る、と」

「はい。私たちがこの世界に転生したというのは、何か理由があるはず。その、理由

を探ることにもいいと思うのですが……」

転生した理由、ね……どうせ、神様のいたずらかなにかだろう。いや、それは無いか……

神、というものは、地上の生物に対して平等である。平等に無関心。歴史上、神が人間に干渉したことなんてただの一回もない。もし、奇跡が起きたとしても、それは人が起こしたものだ。神が起こしたものではない。

はるか昔では、雨だつて地震だつてなんだつて、神様が起こすと信じられていたが、結局は何らかの原因によるものだ。絶滅にしたつてそうだ。神の思し召しなどではなく、それは、絶滅すべくして絶滅する。何かの要因のために。だからもし、本当に神という存在がいたとしても、それは、俺たち生物に対して無関心と仮定することは簡単だろう。「僕は賛成だね。涼也はどう思ったんだい？」

などと考えていると、雨に話を振られる。

「ん、ああ……」

考えてきただけあつて、しつかりした設定だな、なんて言えるわけないし……さて、どうしたものか。とりあえず、否定するという選択肢はないわけだが、疑問点だけ出しておくことにしよう。

「一つだけ。仮に転生者がいたとしても、俺たちの年齢層、ましてや、この高校にいると

は限らないと思うんだが？」

そう、転生者が限られた地域だけにいるとは考えにくい。もしかすると、日本中各地に転生者はいるかもしれないのだ。

「そうだね、一理ある。姫はどうお考えで？」

「ええ、私も同じ考えです。ですから、部活といっても、学内のものという訳ではありません。放課後に集まる口実のようなものでしょうか？」

なるほど、そう来たか。俺たちが勝手に集まるのなら、他に入りたいという輩は出てきにくい。そして、本当に転生者がいたとしたなら、簡単に引き入れることが出来るだろう。

「僕は姫に賛成です。涼也は？」

「ま、いいんじゃないか？」

どうせ何を言っても仕方がない。流れるがまま、流されよう。

「とりあえず、場所は未定ですが、メンバーはこの3人ということで。活動場所については、追って連絡します」

話は終わった。そして、俺の安らかであった放課後もいろんな意味で終わった。

「それにしても、何故涼也まで？」

諦めて、自棄になっていた矢先、雨が助け舟を出してくれる。

「そうだよな、俺いらないうな。俺、転生者じゃないし」

「いえ、涼也さんには転生者を見つけた際の補佐役となってもらおうと思ひまして。雨さんも、涼也さんにフォローを頼んでいたみたいですし、私たちのことを知っている方がいる、というのはプラスだと思うのです」

「いかに、なことを言っている。が、私をフォローしろ、と言っているようにしか聞こえない。」

「なるほど」

「雨は納得してしまっている。」

「お二人とも、これからよろしくお願ひします」

「ええ、僕は姫の剣です。たとえ、地獄の果てでもお供致します」

「こうして、俺はまんまと神崎の共犯者とされたのだった。」

部活動を始めました

ある日、俺と雨は神崎に呼びたされた。なんでも、集まる場所が決まったとのことである。

「……か……？」

海沿いの第3倉庫。うん、昭和の映画で出てきそうだ。その辺にゴロツキとか居ないよな……？」

「貰った地図によると、ここで間違いないみたいだね」

「だよなあ……」

地図を受け取った瞬間から、何となく倉庫だということは分かっていたのだが、まさか本当に倉庫だとは思わなかった。

「確かに予想外ではあるけどね。姫が何も無く僕らをこんな所に呼ぶとは思えない」
「それもそうだな……」

雨は非常に純心である。こんなやつを騙している、と考えると少し心が痛くなる。

「ほら、入口はあそこみたいだよ」

閉め切られた大きなシャッターのそばに、引き戸がある。一応、ノックをしてみる。

すると、神崎が戸を開ける。

「お二人共、ようこそ。とりあえず、中へどうぞ」

「はい、それでは失礼します」

倉庫の中は広かった。もちろん、こんな所にあるのだから広いというのは当たり前なのだが、ほとんど何も置かれていない状態で、隅の方にいくつかのソファや机が置かれていただけだった。その側には本棚も置いてあり、仕切りは存在していないが、ドアに近いその一角だけ部屋になっている、といってもおかしくない表現であろう。

「姫、失礼ですがここは……？」

「ここは、私の家、いいえ、今は私が所有する倉庫です」

「は……？　神崎の所有物……？」

何を言ってるんだ。こんな倉庫と言っても、この広さだ。ひとつを所有なんて、いくらかかるか分からないぞ。

「はい。この辺り一体はうちの所有する倉庫で、ひとつを譲ってもらっていたのです。集まれる場所、と考えると、やはりここが良いのではないかと思ひまして」

確かにここなら、誰に盗み見されることもないだろう。だが、理解はできても納得出来ない俺がいる。

「おいおい、うちの倉庫って……お前ん家、そんなに金持ちなのかよ」

「ええ……あまり、言いたくはなかったのですが、私は神崎財閥会長の娘です」
小さなため息をついて、彼女は言う。

「へえ……あの神崎財閥のねえ……」

「思つたより驚かないんですね」

「まあ、な」

雨から顔だけでなく、姫と疑われるほどの振る舞いをどこで習得したのか、と疑問が残っていたのではあるが、むしろ納得である。つまり、神崎財閥の教育の賜物ということだろう。

「とりあえず、座ってください。お茶を入れますから」

言われるがまま、ソファーに座り、そばにある本棚に目をやる。本棚には——なるほど、中二病関連のものか……もしかすると、神崎はここで一人中二病に明け暮れていたのかもしれない。そう考えると、涙が出てきそうになった。

「どうしたんだい？ そんな、悲しそうな目をして」

そんな俺の様子に気がついたのか、雨は俺に話しかけてくる。

「ああ、いや気にするな。あいつも不憫だと思つてな」

「不憫？」

おっと、本音がポロリしてしまつていたようだ。

「いやな、誰にも言えない秘密をもって、こんな所で一人でいたと考えるとな」

「そうだね。僕には涼也という理解者がいたから、そういう苦しみはなかったからね……本当に、君には感謝してもしきれないよ」

「なんか、誤魔化すために言ったつもりなのに、勇者の勘違いのせいで、とてもは気恥ずかしくなってしまう。」

「今度は僕の番だね」

「そう言つて彼は微笑む。」

「これが勇者クオリティと言うやつなのか。モテる理由がわかる気がする。俺には到底真似できないだろう。」

「どうぞ、紅茶です。お二人共、何をお話されていたのですか？」

「男同士の話つてやつだよ。それより、これからどうするつもりだ？」

「テーブルに置かれた紅茶に砂糖を入れてから啜る。これがなかなか美味しい。こういうものの味については、あまり詳しくはないけれど、美味しいということだけは理解することが出来た。」

「方針については、以前話した通りです。他に転生者がいたならば、こちらに引入れるつもりです」

「その転生者が乗り気じゃなかったら？」

「涼也、それはどういう意味だい？」

「他意はない。例えば、だ。神崎と雨が善とするなら、悪の転生者がいてもおかしくはないはずだろ？ その場合はどうするつもりだ？」

「転生者の全員が全員、善とは限らないはずだ。人に恨みを持つような転生者だった場合どうするかを考えなければならぬ。」

「そうだね。転生は何も人間限定のものじゃない。魔族も出来るはず。魔王に限っては敵対するような事は無いと思うけど、他はわからないね」

「魔王は？ 何故です？」

神崎は疑問に思ったのか、雨に質問をする。

「そうですね……今だから言えることですが、僕と魔王は交友関係にありました」

「勇者と魔王が……？」

神崎は目を見開く。どんなお伽噺でも、勇者と魔王が友人であったというものはないのだ。勇者は狩る側で、魔王は狩られる側。それが、物語の摂理である。

「はい。はじめは言われるがまま、魔王を討伐しようとしていました。ですが、魔王と話し、戦い、そして、僕は魔王の夢と同じ夢を見るようになりました」

「魔王と同じ夢？ なんですか、それは？」

「——人間と魔族の恒久平和……」

気がつくくと、思ったことが口から零れていた。

「あれ、涼也。話したことがあったつけ？」

雨は驚いていた。話してもいかなかったことだったから、それもそうだろう。

「いや、なんとなくだ。魔王の夢が人間の全滅なら勇者が賛同するはずないだろ？ 勇者が賛同するなら、それくらいだと思ったんだよ」

「なるほどね。そう、魔王は平和を望んでいたんだ」

魔王というのは、ものを滅ぼすべき存在であるというのに、なんとも特殊な魔王である。

「ですが、人間と魔物は戦争状態にあったのは……？」

当然うまれてくる理由である。魔王が平和を望んでいるというのに、戦争をする理由なんてないだろう。

「戦争をしていたのは、魔王の反乱分子。つまり、一部の人間を嫌う魔族です。本来、魔王は関係がなかったんです。人間は魔物の一部との戦争を魔物全部との戦争と思いついてしまったんです」

ここで明かされる事実。勇者にしてみると、懐かしい思い出のようなものなのだろう。

「では、魔王は大丈夫だとして、その反乱分子が転生していた場合、どうするかという話

ですね」

「そういうことになりますね。実際のところ、魔族自体はこの世界に存在しています」

「魔族がいる……?」

そんな話は初めて聞いた。もしそうなら、今までどこかで出会っているだろうし、ニユースにもなっているはずだ。だけど、そんなものには出会ったことがないし、ニユースにもこれといって出ていない。

「魔族、と言つても下級魔族、魔物だけだね。ドラ○エでいうところの、スライムと思つてもらつていい。話は通じないから、交渉の余地はないね」

なるほど。そういう類のものがこの世界に來ているというのか。しかし、この世界にあちらの世界にから來ている、という表現は怪しいだろう。もしかすると、初めからこの世界にいた、ということも考えられなくもない。

「なるほどな。その魔物はどうしてるんだ?」

「人的に無害なら放置、有害なら排除しているよ」

「排除つて……」

この世界では、ほとんど魔法というものが使えない。武器だつてそう簡単には持ち運ぶことは出来ない。

「魔法の類がほとんど使えないという条件はほとんど向こうも同じだからね。徒手でな

んとかなってるよ」

雨は苦笑しながら言う。

「とは言ってもな……まさかお前、たまに怪我してたけど……」

雨はたまに、体中にガーゼを貼っていたり、包帯をまいたりして学校に来ていたこともあった。そのときは、転んだだったり、階段からおちただったり理由をつけていたのを覚えている。

「うん、まあ、そういうことだね……すまない、巻き込みたくはなかったんだ」

こういうところだ。最近は幾分かマシなのではあるが、こいつは勇者であったがゆえなのか、人を頼らない。1人でなんでも解決しようとする。巻き込んで欲しい、とは言わないが相談のひとつでも出来たらうに。

「分かってるって。気にするな。しかし、よく魔物がこの世界にいるって分かったな」

そこで疑問である。なぜ、こいつはこの世界で魔物を見つけられたのか。それも1度ではなく何度も。

「どうも、魔物には敏感なようですね。前世に得た勘に近いものだと思う」

「なるほど。そういうもんか」

「そういうものだよ」

とりあえずは、それで納得するしかなさそうである。

「とりあえず、これからは言え。なにか手伝えることがあるかもしれない」
「分かった。そうするよ」

とりあえず、魔物についてはこれくらいでいいだろう。それにしても、先程から神崎が静かである。何かを考え込んでいるようであるが、どうしたのだろうか。魔物に会ってみたくとか考えてなければいいのだが……

「姫様……?」

雨も気になったのか、上の空の神崎を呼ぶ。

「——はい!? ……すみません、少し考え事をしていました。魔物の件については、毎回報告をお願いします」

「分かりました」

「そして、転生者の件についてですが、正直に言うと、良い策が思いつきません。相手から自分は転生者だ、と言ってもらえればそれに越したことはないですが、そんなことは無いでしょう。こちらから見つけなければならぬとなると、慎重にならねばなりません。下手をすると一般人を巻き込んでしまう可能性がありますから」

その巻き込まれた一般人第一号が貴方ですけどね、とは口が裂けても言えなかった。「愚策ですが、魔物を追っていれば他の転生者と遭遇することもあるかもしれません。雨さんのように魔物を感知できる転生者なら魔物を追うでしょうから」

「そうですね。それしか、現状方法はなさそうです。涼也はどう思う？」

「実際それしかないだろうな」

とりあえず、転生者についてはこれで話は終わりとなった。

「それと、雨さん。私に魔法を教えて貰いたいのです」

いきなり何を言い出すかと思えば、神崎は魔法の教えを乞う。これが、この誰の目にもつかず、そして広い場所を確保出来る倉庫に俺たちを読んだ一番の理由だろう。ここなら、基本何をしてでもバレない。

「魔法を？　ですが、この世界で魔法はほとんど使えないですし、そもそも、姫は魔法の使い方を知っているはずでは？」

「ええ、そうなのですが、あちらとこちらではどうも魔力の運用が微妙に違うらしいのです。ですから、少しでも使えている雨さんに教えてもらうのが良いかと思っただけです」

いかにも、らしい理由をこじつけている。堂々と教えてもらおうとしているが、内心ヒヤヒヤしていることだろう。

「そうですか。分かりました。でしたら、僭越ながら、お教え致します」

そんなこんなで、元勇者による魔法講座が幕を開けたのだった。

後輩は転生者（笑）

雨の魔法講座が始まり、数日。神崎には魔法適性があつたらしく、簡単な魔法なら使えるようになっていた。

「しかし、お前も熱心だな。そんな魔法、使っても仕方ないだろうに。マジシャンにでもなるつもりか？」

例の倉庫で神崎は魔法の訓練に明け暮れている。雨は用事があるとかなんとかで、まだ倉庫には来ていない。

「そんなつもりは無いですよ。ただ、カッコイイじゃないですか！」
神崎の目はいつになく、キラキラしていた。

中二病の原動力。カッコイイから。それは、俺には理解のできないものであつた。
「カッコイイから、ねえ……しかし、本当に使えるようになるとは思わなかつたな」

もともと、前の世界で魔法が使えていて、魔法適性もあるにもかかわらず、魔法の行使が分からないという事で、一悶着あつたようだが、どうにか誤魔化せたらしい。

「慣れてみれば簡単ですよ？　魔法陣の術式なんかは、意味のわからないところもありますすが……」

「お前、魔法陣の術式なんかも調べたのかよ……」

普通、そこまでするか……？

「はい。よくあるじゃないですか。魔法は魔方陣や呪文の構成が意味を持っていて、それを知ることにより深く魔法を知れるって」

「お、おう……ソウダナ……」

この情熱をほかのところに持っていくことは出来ないのだろうか。

「それに、オリジナル魔法とか出来たらカッコいい!!」

さすがは中二病。やっぱりそこに辿り着くんだな。

「ただ、やっぱり術式についてはわからないところが多すぎるんですよ。言語は英語に似たようなものなんですけど、存在しない単語が多すぎて……」

やはり、術式は異世界のもの。いくら、言語が英語に似ているとはいえ、分からないものも多いのだろう。

「ん？ お前、英語できたのか？」

「はい。家の都合で海外によく出ることがありましたから、日常会話程度ですが英語はできます」

さすがはお嬢様といったところだろう。なぜ、そんなお嬢様が中二病という重篤な病に犯されたのかというのは不思議である。

「なるほどな、テストの時とか便利そうだな。しっかし、雨のやつ遅いな」

俺と神崎が倉庫についてから時計の針は一周してしまっている。来れないとは言っていないから、来るとは思うのだが、なかなか来ない。

「学校のテストは文法がしっかりしているのだから、あまり使えませんか？　そういえば、雨さんの用事ってなんだったんですか？」

「ん、ああ。なんでも、少し気になることがあるから調べてくるって言っていたな。詳しいことは聞いていないけどな」

別段、危ないことをする訳でもなさそうだったため、直ぐに理由は聞かなかった。家庭の事情とかもあるだろうからな。

「気になること、ですか。転生者関連のことでしょうか？」

「さあ。そこまでは分からないきたら教えてもらえばいいだろ」

「それもそうですな」

それから、しばらくして、雨が倉庫に入ってきた。それも、扉を勢いよく開けて。いつもは静かに入ってくるのに、どうしたのかと思ひ、俺と神崎は雨を見る。

「姫、涼也。転生者がいるかもしれない。それも、うちの学校に」

その言葉は俺と神崎を驚かせるには十分すぎた。

「転生者が？　どんなやつなんだ？」

これは大収穫だ。身近に転生者がいる可能性はほぼゼロだと見ていたが、こんな近くにいるとは思ってもみなかったし、こんなにも早く見つかるとは思わなかった。

「ああ、まだ会って話してはいないから情報だけなんだけど、名前は藍白可憐。1年生だね。右目に眼帯、左手に包帯をしていて、持っている力を押さえつけているらしい。なんでも、ダークウイングという悪の組織と戦っているらしいんだけど、その悪の組織が魔物に関係しているんじゃないかと思うんだ」

途端に頭が痛くなった。期待した俺が馬鹿だったというのか。なんだ、その中二病は。しかも、相当重傷ときたものだ。

「いや、雨よ……多分それは無視していい」

これは、関わってはダメなやつだ。魔物に繋がっているどころか、闇に繋がってしまっている。それはダメだ。自分から地雷を踏みに行く必要性は皆無だ。

「あれ、涼也は賛成すると思ってたんだけどね。どうしてか、理由を聞いてもいいかい？」

「いやな、俺が思うにそいつ——「会いましょう!!」……」

中二病だぞ。と言おうとしたところで、神崎に遮られてしまう。なんか、神崎の目、すごいキラキラしている気がするのには気の所為だろうか。

「お、おい、神崎。どういふつもりだ？」

俺は神崎に耳打ちする。

「どうもこうもないですよ！ 仲間が……仲間がいるんですよ!! 引き入れない訳には行かないでしょ!!」

理由が不順すぎるんだが……

「いや、お前。どう考えても中二病の一般ピーポーだぞ。さすがに巻き込む訳には行かないだろ」

これが、ただの部活であるならば、引き入れるのには反対しなかっただろう。しかし、俺達は魔物やほかの転生者と敵対する可能性もある。そうなった場合、身の安全を保証することは難しくなってしまうのだ。

「うう……そうですね……でしたら、表面上だけでも!!」

なんとしても、その藍白という人物と中二ごっこがやりたいらしい。

「……どうなっても知らんからな」

「二人共、どうかしたのですか?」

俺と神崎のやり取りを不審に思ったのか、雨から声が掛かる。

「い、いえ、気にしないでください。とりあえず、明日、藍白可憐さんにお会いしてみましよう」

本当に、どうしてこうなった。

翌日の放課後、その藍白可憐を探すこととなった。というか、すぐ見つかった。眼帯と包帯をしている人間は相当目立つ。

「藍白さん。少しいいかな？」

「お前達か。私を嗅ぎ回っていた連中というのは。ここではなんだ。ついてこい」
踵を返した藍白についていく。

階段を昇り、屋上への扉を開けたところで、強い風が入ってくる。

「うむ。今日は風が騒がしいと思っただけだが、こういう事だったとはな」

「どういうことでしょうか？ 聞いたらやややこしいことになる、俺の勘が働きかけているため触れないようにする。」

さて、向こうに任せておくと、埒が明かない気がするため、先手を打つことにした。

「それじゃ、藍白だっけ。自己紹介といこう。俺は2年の風鳴だ。こっちは鈴童と神崎」
交渉役は俺と神崎だ。雨だとボロを出しかねない。やりたくはないが、やらせるよりはマシだろう。2人にはなるべく、転生者や魔物に関する話はしないように口止めしてある。

「ふむ、私は藍白可憐。墮天使ルシファアの生まれ変わりにして、この世の秩序を守るも

のだ」

かっこよく決めポーズを決める藍白。しかし、墮天使の生まれ変わりと来たか。これは、想像以上である。

「墮天使だつて……？ 何故墮ちた天使が秩序なんかを守っているんだい？」

突つ込むところはそこなのか、雨よ……

「知れたこと。秩序を守るのに、天使も墮天使も関係ない」

いかにも、なことを言っているが、秩序を守らなかつたから墮天したんだろうが……
なんで、雨は納得してるんだよ。そして、神崎はすごい目を煌めかせている。

「さて、小手調べといこうじゃないか。場合によってはこの封印、解かざるを得ないだろう」

藍白は包帯を解こうとする。この藍白可憐という人間、実にノリノリである。見ていて面白いものがある。

「待つてください。僕達は敵対するつもりはありません。それに、墮ちたとは言え、天使の力は強力なはず。こんな所で解放したとなれば、被害は免れません」

焦つたような口ぶりで雨が言う。確かに本物ならば、被害は甚大なものになるだろうが、相手は一般人だ。封印（笑）を解いたところで、なんの被害も出ないだろう。

「ふむ、分かっているではないか。では、率直に問う。貴様らは私の敵か、味方か？」

これで続けるようならゲンコの1発でも御見舞してやろうかと思っていたら、話し合
いをしようとしているため、自重しておくでしょう。

ていうか、どう返すのが正解なんだ？ 正解がわからない。

「生憎、俺は一般人でな。敵でも味方でもないさ。詳しくは、お姫様にでも聞いてくれ」
「なるほどな。しかし、貴様からは邪気を感じたのだが、気のせいだったか。しかし、姫
だど？ どういうことか、説明してもらおうか」

冗談でもよして欲しい。そっちの仲間入りをする気は全くない。とりあえず、神崎に
バトンタッチだ。

「では、私が説明をします。私は前世、一国の姫をやっていました。こちら、雨さんは、
元勇者です」

「クク……よもや転生者が他にもいるとはな」

藍白は不敵に笑う。

「そして、私達はある組織を追っています」

「もはや……」

神崎の発言に、藍白はハツとする。表情がコロコロ変わるので、見ていて面白い。女
優にでもなれるんじゃないか？

「はい。ダークウイングです」

「私以外にもあの組織を追っている者がいるとはな……」

それから、中二病全開の会話が続いたのであった。話の内容は、1割も理解できなかったのは言うまでもないだろう。とりあえず言えることは、藍白可憐を引き入れるための口実だという事だ。神崎は何気に楽しんでるようであった。

「——という訳です。お手伝い願えないでしょうか」

「ふむ、よかろう。して、その基地とやらの場所は何処にある？」

どうやら、仲間に引入れることには成功したらしい。これが、良かったのか悪かったのかは分からないが、それはこれから分かることだろう。

「それは、また明日にしましょう。遅くなってしまうから。それと、今話したこと機密事項としてください。私たちとあなたがつがっている事をバラしたくはないので」

組織にじゃなくて、学校の生徒にバレたくなだけだろうが……

「ふむ。善処しよう」

ということ、今日のところはお開きになった。

元勇者と一般ピーポー？

「そういや、お前。ほとんど魔法の練習時間が出来てないよな」

「ええ。さすがに、あの子の前では出来ませんよ」

俺達の目の前で本を読んでいる、藍白可憐には聞こえないように話をする。

「む？ 何か用か？」

「いやな、お前よくここの本を読んてるなと思ってな」

「うむ。この世界の書物には、私の知りえない魔術が書かれている故な」

可憐が読んでいるのは、西洋魔術の本。中二病必須のアイテムなのだろう。ちなみに、英語ではなく、日本語で書かれている。

「そういえば、この世界にも魔術は存在したようだよな。どんなものなんだい？」

そういえば、俺がこの世界の魔術に興味が無いということもあり、雨に話したことがなかったか。雨は疑問に思ったらしく、可憐に問う。

「……神秘だな」

可憐は目をそらす。

「分かってないだろ、お前」

「魔術、呪術とも呼ばれるものです。いくつか種類はありますが、有名なものとして、類感呪術と感染呪術があります。例としては、雨乞いが類感呪術、藁人形に杭を打ち込むのが感染呪術の例です。一般的に、呪いという面で知られているのは後者ですね」

可憐の代わりに神崎が教師でもあるかのように、淡々と答える。

「それならテレビで見たことがあるよ。あれは恐ろしいね」

雨は身震いする。確かに、怖い話ではよくあるものである。

「ちなみに、呪術は医療としても機能していたみたいです。民間医療などにもその痕がみられます。温泉治療なども経験的な医療効果が信じられヨーロッパや日本などでも利用され、特定の信仰と結びつき呪術的要素を持つているものもあります。特に日本においては、「詣で」と宿場と温泉地が結びつき、湯治はもちろん宿泊や入湯も禊や払いであったと言われています」

「へえ、この世界の魔術というのは、多様なんだね」

雨は感心したように言う。

魔術、ね……

「どうしたんだい、涼也」

「いや、なんでもない」

俺はこの世界の魔術については否定的である。だが、そんなことを言えばこの場の雰

困気が悪くなってしまふ。自分の考えを人に押し付けるほど、俺は愚かではない。

「む？ ドーナツが残っているではないか！」

「それは俺のだ」

身を乗り出し、ドーナツに手を伸びしてくるふとき者の頭に軽くチョップを入れる。

「あうう……痛いです、先輩……」

可憐は涙目で頭を抑えている。こういう時だけ素に戻るんだよな、こいつ。

「しるか、俺からドーナツを奪おうとするのが悪い」

「あはは……涼也は昔から甘いものが好きだよな」

「甘いものは至高だからな。食べたものを幸せにする。それこそ、魔法だよ」

そういつて、俺はドーナツをくちにする。

実際は松果体からセロトニンが分泌されるからなのだが、もう魔法でいいだろう。幸せだし。

「ていうか、可憐。お前今日お使いあるとか言っただけでなかったか？ まだ時間は大丈夫なのか？」

今日ここに来る前、そんなことを言っていた気がする。

「あつ!? そうでした……完全に忘れてました……うむ、では私はこれで失礼しよう」

ちよくちよく言葉遣いが変わる後輩は荷物をまとめ、そそくさと倉庫を出ていった。

「ところで、二人とも。耳に入れておきたいことがある」

可憐が出て言つてすぐ、雨の表情かわる。その表情から、転生者関連のものではないとわかる。となると――

「魔物関連か？」

「うん、そうだね。ここから、遠くないところに魔物の気配を感じたよ。行つてみようと思っただけど、2人はどうする？」

どうする、と言われても困るものはある。しかし、こいつは放つておくと1人で魔物のもとに向かうだろう。怪我するかもしれないという状況で、1人送り出すという選択肢はない。

「俺も行く。神崎は残つてろ」

さすがに、一般人の神崎を連れていく訳にも行かない。

「なんでですか!？」

自分もついて行く気だったのか、神崎はキョトンとする。少し素が出ているぞ……

「危険かもしれないから、だ」

実際のところは、かもしれないではない。危険なはずだ。そんな所に連れて行って、神崎を守る余裕があるだろうか。

「それを言ったら、涼也さんだってそうじゃないですか」

それは当然の疑問である。俺だって一般ピーポーだ。

「心配すんな。俺はこいつと同じくらいには戦える」

俺だって伊達に雨とつるんでる訳では無い。幼い時から、雨に剣術を教えて貰っているため、その辺のチンピラや有段者よりも戦えるという自負はある。

「え……」

勇者と並んで戦えるという俺の発言に目を広げる神崎。俺と雨を交互に見る。

「本当のことです。涼也は昔からやんちゃだったよね」

これが、やんちゃで済むのかどうかは分からないのだが、やってきて良かったとは思
う。

「そういうこった。木刀かなにか貸してもらいたいんだが……あの模造刀を借りてもいいか？」

雨について行くにしても、徒手では足でまといになるだけだろう。せめて武器が欲しかった。幸い、この倉庫には武器になりそうなものが沢山飾つてある。1つくらい借りても良さそうである。

「なっ!? あれは、世界に一つだけの、聖剣デュランダルのレプリカですよ!? 確か、木刀があるはずなのでお持ちします」

一瞬で拒否されました。しかし、木刀もあるのか。なんでもあるな、この倉庫……
神崎は木刀を探しに、倉庫の奥に入っていく。

「さっきの話。涼也は気に入らなかったのかい？」

神崎が見えなくなつたところで、雨が話しかけてくる。

「さっきの話？ なんのことだよ？」

「この世界の魔術のことだよ」

なるほど。さすがは幼なじみと言つたところだろう。

「ああ、そうだな。この世に怪奇現象なんて存在しない。つまり、魔術は存在しないと
思つてる。例えば呪いだ。誰かが杭を打つた転んだんじゃなくて、初めからそうなる運
命があつたのだ。杭なんて打たなくても、そいつは転んだだろうさ。人間は不幸つてい
うのを何かのせいにしたがる。自分のせいじゃなくて、運がなかつた、呪われたからつ
て。だけど、実際は足元を見ていなかった自分が悪かつたりするんだよ」

思つていたことを口にする。雨に対しては隠す必要も無いだろう。

「本当に涼也はリアリストだね。だけど、一理ある。つまり、思い込みが呪いという実在
しないものを作る、と。だけど、僕の魔法は信じたよね」

「それに関しては信じざるを得んかつたならな。お前が魔法を使えていなかったら信じ
ていなかつたさ。転生云々もな」

見てしまったものは、否定することは出来ない。確かに、ないものを証明するという
こは、難しい。悪魔の証明である。魔法というものがない、という根拠はない。つまり、
魔法はある。こんなくだらない証明は信じていない。だが、あるものを証明するの
は簡単だ。それを提示すればいい。魔法を提示された俺は、魔法という存在を認めるほ
かなかったのだ。

「それは、魔法に感謝だね」

雨は笑う。確かに、雨が魔法というものを使えていなかったら、俺はこいつを転生者
だとは思っていなかっただろう。

「お待たせしました」

そうこうしていると、2本の木刀を持った神崎が、それを俺たちに渡す。

「お気をつけて。私はここで待機をしています」

「帰っててもいいんだぞ?」

倉庫の鍵は持っている。別に待っている必要も無いだろう。

「お二人が心配なんです。無事な姿を見せてください」

「承知しました」

なるほど。役に入りきっているわけだ。

倉庫を出て、雨の後ろを歩く。

「んで、何処にいるんだよ？」

「学校の裏山の麓あたりかな。どうも、複数いるっぽい」

「複数、ね。とりあえず、行ってみるか」

雨でもたまにしか見つけることの無い魔物が複数いるというのは些か疑問である。どんな状況かは行ってみないとわからない。あまり、厄介でなければいいのだが……

そんなこんなで、学校の裏山のふもとに到着後。隠れられる場所から、魔物を観察する。

「オオカミと……小人かあれ……？」

「ワーウルフにゴ布林だね。他にもいるようだ。やれそうかい？」

木刀を強く握り、今にも飛び出しそうな雨。

「まって、情報も無しに突っ込ませようとすんな。俺が死ぬ。弱点やら教えろ」

それを、どうにか抑止する。さすがに、敵の情報が見た目だけというのは愚かすぎる。

「弱点かい？ まず、ワーウルフの弱点は——」

少しだけ、魔物講座が幕を開けたのであった。

「びつとこんなもんか」

戦闘終了。とくに、怪我もなく終わることが出来た。倒した魔物は空気に溶けるかのようには、消えていったため、倒したという証拠になるようなものがないのが少し残念なところではある。

「すごいな、涼也は」

雨は感嘆したように言う。

「気合いだ、気合い。それに、そんな強いものでもなかっただろ？」

実感、大したことは無かった。事前知識も、雨のカバーもあつたし、あんなのに遅れをとるつもりは無い。

「それはそうなんだけど、あの魔物は駆け出しの冒険者だと、やられることがあるくらいには危険なはずなんだけど……」

「なるほどな。ギルドってのは冒険者の教育もできてないのか」

知識というのは重要なものである。敵を知り己を知ればなんちやら、という言葉もあるように、敵も自分のことも知ることが出来なければ勝つことは出来ない。それなのに勝とうというのは、怠惰である。

「基本的に、冒険者には教育なんてないからね。学ぶより慣れろって場面が多かったよ」「それで、最低限の知識もなくお陀仏か。笑えねえな」

本当にバカバカしい。学ぶより慣れろってというのは、10をしつかり学んだ上で慣れ

ろと言うものであると俺は思っている。基礎あつての応用だ。基礎が出来ない奴に、それ以上のことは出来ないだろう。

「そうだね……」

「しかし、なんでまたこんなところに魔物が屯していたんだか」

「確かに……こんな人目につきやすそうなところに魔物がいるというのは不自然だね」

「だろ。ここは麓だ。何かある訳でも無い。いるなら山の中だろ。遠足ってわけじゃないだろうし、山に強い魔物が出たから、それまで住んでいた魔物が逃げてきた、とか？」

「それが妥当なところだと思う。ただ、魔物の気配は感じないんだよね……とりあえず、覗いて、やれそうならやる。無理なら逃げる。そんな所でどうだろう？」

さっきのは、木刀でどうにかなったが、それ以上となると危険だろう。

「賛成だ。あれより強いとなると、少し考えた方が良さそうだ。判断は任せる」

「分かった。何かあるかわからないし、認識障害魔法を使っておこう」

なんか、初めて聞いた単語が聞こえた。なにその便利そうな魔法。

「認識障害魔法？ 魔法は使えないんじゃないやなかったのか？」

「攻撃魔法はあまり使えないんだけど、こういう系の魔法はある程度までなら使えるらしいんだ」

「なるほどな。それは、初めから使っておいて欲しかったけど、まあいいか。頼むわ」

そういうのは、初めから言つて欲しかった。こいつはあれか？ 聞かれなかったからな、とかいうタイプなのか？ 違うのは知ってるけどさ！

そして、山中。雨のリーダーが役に立たないため、手探りで探す羽目になっていたのだが、雨の歩みが止まった。

「そんな……バカな……」

そして、震えていた。

「あれは——ムゲ」

咄嗟に俺の口を手で抑える雨。

そこに居たのは、でっかいオオカミでした。

普通車くらいの大きさはあるぞ……何食つたらあんなでかくなるんだよ……

「静かに。とりあえず、逃げるよ」

俺は頷き、2人で山を静かに降りていったのであった。

「おい、あれはそんなやばいのか？ 確かにでかかったけど」

帰路。あのオオカミについて聞いてみる。

「やばいなんてものじゃないよ。あれは、フローズヴィトニル。こちらの世界というところのフェンリルだよ」

フェンリルというのは、ゲームで名前くらいしか聞いたことがないためよく分からない。
い。

「イマイチわからんが、ヤバいつて認識でいいんだな」

「まあ、うん。とりあえずはそれでいいかな……」

雨は苦笑する。

「しかし、なんであのオオカミのことは察知できなかったんだ？」

「うん。あれは、魔物と言うよりも神獣だからね」

うん。よくわからん。察知できるのは魔物だけであり、あのオオカミはその部類に入るではなかったということでもいいのだろうか。

「それで？ どうするつもりだ？」

「ううん……正直に言うと、あれは全盛期の僕にも討伐は難しいと思う……」

勇者にも討伐は不可能ときた。これ、もう世界が減びるんじゃないんですかね？

「それなら、手出しは難しいか……」

「無視するのかい？」

雨は不満そうに言う。元勇者というだけあって、捨ておくことは出来ないのだろう。

「さすがに無視はできんだろ。どうにかしようにも、手立てがない。幸い、まだ実質的な被害は出ていない。近いうちに出るかもしれないが、それまでに対策を考えるしかないだ

ろ」

「それしか方法はなさそうだね……」

雨は納得がいつていないようだが、今は抑えてもらうしかない。何か方法を見つけ次第動く他ないだろう。

「とりあえず、神崎に報告だな」

倉庫に戻り、事の顛末を神崎に話して、今日は解散となったのであった。

体育祭の準備とともに

フエンリルを見つけてから数週間。特に解決策が見つかる訳もなく、ダラダラと時間だけが過ぎていった。ただ、あの山は神崎財閥の所有物であつたらしく、現在では立ち入り禁止となっている。そのためなのか、フエンリルによる人的被害はまだ出ていないようであつた。

「そういえば、体育祭の種目は何に出るんです?」

6月。そろそろ、体育祭の時期である。

「俺と雨はリレーだな」

種目決めの時に寝ていたら、強制的に決められたというのは、良い思い出である。

「リレーですか。応援しますね」

「はい。応援に伝えてみせましょう」

流石は元勇者。返し方がテンプレである。歯痒くならないのだろうか?

「いいのかよ? お前んとこの組は白組だろ?」

そう。俺たち2組は紅組。神崎の組は白組なのだ。さすがに、白組が紅組を応援する訳にも行かないだろう。

「そうでした……どうすればいいんでしょう……？」

そのことに気づいたのか、困った表情を浮かべる神崎。これはこれで面白い。

「白組応援しとけばいいだろ」

「そうしておきます……可憐ちゃんは何に出るのです？」

神崎は残念そうにする。仲間内を応援できないというのは、モヤモヤするのだろう。

「ふ、我は障害物競走だ」

「あー、あれか……」

思い出したくもない思い出。あれは、障害物競走と言うにはあまりに過酷すぎた。普通、高校生の障害物競走にローションなんか使いますかね……

「去年は凄かったからね……涼也がまさかあんなことをするなんて……」

「一時期伝説にもなっていたらしいですね、あれ……」

2人は遠い目になる。

もうやめて！ 俺のライフは既にマイナスよ!?

「む？ どど、どうしたというのだ？」

俺たちの反応にビビる可憐。

「いや、なんでもない。頑張れよ？」

今年は普通かもしれないし、下手な先入観を持たせるのは良くないだろう。故に、俺

は可憐の肩に手を置き、世辞を送るのだった。

「え、あの……先輩？　ちよつとどういう意味ですかあ!？」

取り残された可憐の悲痛な叫びが倉庫に轟いたのであった。

翌日の放課後。

「それでは、体育祭運営の会議を始めます」

凜とした声が、会議室に響く。声の正体は、この学校の生徒会長である雨宮凜である。

それにしても、実行委員ね……

会議室の一角に座っている雨と俺。気付けば、実行委員になってしまっていた。実行委員は、各クラス2名。別に男女各一名ずつである必要は無い。

事の発端は、立候補者がいない中、雨が実行委員を申し出たことであつた。すると、手を挙げる女子が出るわ出るわ。結局、雨が推薦することとなつたのだが、何故か手を挙げていなかった俺が推薦されたのだ。解せぬ。

「——それで、男子二人の2年2組には機材運びを頼みたい。構わないだろうか？」

「問題ないです」

会議はスムーズに進んでいく。これが、カリスマというものなのだろうか。

「——では、これにて本日の会議は終了とする。詳しい事は次の会議で話す。解散」
帰り支度を会議室を出ようとすると、声を掛けられた。

「そのこの2年2人。鈴童と……風鳴だったか?」

「会長? どうしたんです?」

声の正体は生徒会長であつた。雨が返事をする。俺たちになんの用だろうか。

「いや、済まないな。面倒な仕事を押し付けてしまつて」

律儀な人。それが俺の中の印象だ。

「気にしないでください。誰かがやらないといけないことですから」

「お前らしいな。それにしても、鈴童。今年はどうな女子を引連れてくるかと思えば、男子なのは驚いたぞ」

そういうえば、雨は去年も実行委員だつたような気がする。それで、生徒会長と面識があつたのか。

「ええ、1番信頼出来るので」

何言つてるの、この元勇者。そして、何その勇者スマイル。言われているこつちが恥ずかしいんですけど?」

「ほう。鈴童をして、そう言わせるとは相当なんだな」

生徒会長は感心したように言う。

「そんなことは無いですよ。俺はただの一般人です」

「君は面白いな。これから、よろしく頼む」

生徒会長はニヒルに笑い、踵を返した。

「……さて、帰るか」

体育祭の実行委員会のおかげで日は暮れていた。もともと、神崎には今日は行かないと伝えてある。

「そうだね。それにしても、会長に気に入られたようだね」

「そうか？ 誰にでもあんな感じじゃないのか？」

そもそも、気に入られるようなことは特別なにもしていない。

「確かにそうではあるんだけど、会長が面白いというのは稀だよ」

「俺はそんなに面白おかしいのか……？」

なんか、ショックだ。確かに、去年の体育祭の失態はあるが、それにしてもである。穴があつたら入りたい。そして、泣きたい。

「なんていうか、言い表せないんだけど、そういう意味じゃないと思うんだけどね……」

「じゃあ、どういう意味だよ!!」

面白いという言葉にそれ以外の言葉があるだろうか!? いや、ない!!

「ところでだけど、魔物の気配する」

話題が逸らされる。他の話題なら食いついていたところだろうが、魔物の話題ならば仕方がない。この鬱憤は魔物にぶつけるとしよう。

「……どこだ？」

「学校だね。校庭のトラック付近にいるっぽい」

「トラック？ 見た感じ何もいないぞ？」

「ここ、会議室からはトラックが見える。」

そこにいるのは、部活が終わり、片付けをしている生徒が数人いるだけで、他の生き物は見当たらない。

「どういうことだろう。気の所為なのかな……？」

「俺には気配がわからないから、基本お前頼りだ。お前が気の所為って思うならそうなんだろう」

俺にはそういう技能はないから、全くわからない。これに関しては、雨に任せるしかないのだ。

「ううん……被害は出ていないようだし、気の所為なのか、人に害を及ぼす魔物じゃないかのどちらかだね」

「そんなら、無視で良さそうだな」

人を襲う魔物というのは、人を見た瞬間襲いかかる。この前の魔物がそうだったの

だ。まるで、人を襲うようにインプットされているかのようだった。

「本当に魔物がいるのならあまり無視はしたくはないのだけれど……」

「本当に魔物がいるんなら、明日にでも分かるだろう」

「どういうことだい？」

「人を襲うことはなくても、何かがいるとなれば、それなりの変化が出るはずだ。その辺を部活動生にでも聞けば何かわかるかもしれない。人的被害は出てないんだ。1日くらい大丈夫だろう」

「もしも、魔物がいるのなら何かしらの変化が出てくるはずだ。部活動生になにか違和感がないかどうか聞けば、そのへんは分かるだろう。」

「確かにそうだね。姫には報告するかい？」

「一応しておいた方がいいだろうな。多分まだ倉庫にいるだろうし、行くか」

「これが、学校でなければ多分報告することは無かっただろう。一応、神崎は一般人だし。」

「しかし、学校は毎日通う場所であり、そこに魔物がいるとなれば、何が起こるかわからない。注意喚起しておくに越したことはないだろう。」

「二人とも、どうしたんですか？ 今日とは来なかつたはずでは？」

倉庫に入ると、神崎だけが残っていた。可憐は先に帰ったようだ。

「それはそうなんだが、一応報告にな」

「報告？」

「魔物だ魔物。それも、学校に」

「学校に魔物……？　どんな魔物だったのですか？」

おそらく、神崎は俺達が対処してきていたと勘違いしているのだろう。

「それが分からないんです」

「分からない？　どういうことですか？」

「気配はしたのですが、視認することが出来なかったのです。気の所為ということもありませんし、被害は出ていないようだったので、放置することにしました」

「そうですか。人的被害が出ていないのなら、保留にしておいても大丈夫でしょう。報告、ありがとうございます」

もともと、お姫様が板についていた神崎。最近では、本当にお姫様なんじゃないかと思ふことがある。なりきりスキルが高すぎやしないか？

「それにしても、見えなかったですか」

「本当に雨の気のせいかもな」

「そうかもしれないね。気配なんて、何となくだから」

いま、雨がとんでもない発言をしたぞ……

「おいおい、そんなものを信じてたのかよ……」

「だいたいそんなものだよ。最初はなんとなくだったものが、繰り返されることによって確信に変わる。それが、もし違うとしても最初に感じる「なんとなく」というのは大切なんだよ」

「そんなもんなのか」

全く理解できない俺の横で、神崎はメモを取っている。熱心なこと……

「しかし、本当にいるとしてなんで見えなかったんだろうな？」

「考えられるのは、だいたい5通りですね」

「5通りもあるのかよ」

多過ぎないか？

「はい。1つ目は、雨さんの勘違い。これが一番望ましいですね。2つ目は、ありがちですが、魔物が透明の場合。3つ目は、魔物が極端に小さい場合。4つ目は、魔物の動く速度が人間には認識できない速度という場合。ですが、これは辺りに何らかの影響があるでしょうから除外ですね。5つ目は、魔物が生徒に寄生している場合。これが一番厄介ですね」

なんでそんなに考えることが出来るのだろうか。それにしても――

「寄生の場合って結構やばいんじゃないか？」

「うん。魔物にもよるだろうけど、持って1ヶ月。早めに対処しなければ不味い」

1ヶ月というのと、大体体育祭が目安になるか。

「もし、対処できなかつたら……?」

神崎が雨に問う。

「宿主ごと殺すしかなくなります……寄生する魔物に乗っ取られたあと、宿主に残るのは破壊衝動だけですから」

その事実を聞き、神崎は顔を青くする。

「そりゃ、なりふり構ってられないな……とりあえず、魔物の断定が最優先か」

雨の気の所為だったということに越したことはないのだが、悲観的に準備して、楽観的に行動するべし。とりあえず、最悪の事態を想定して、ことを進めていくべきだろう。

「可憐には話すべきか……」

そう。探すのなら、人手が大いに越したことはない。

「墮天使の力が借りれるのなら、それに越したことはないね。二人とも、どうしたんだい?」

ちにみに、雨は可憐のことを未だに転生者だと思っている。思い込みつて本当に怖い。

「い、いえ、なんでもありません。確かに、人手は欲しいですが、危ないことに首を突っ込

ませるわけにいきません。もともと、関与しなくていい問題ですし……」

もともと、神崎が引き入れるという判断をしていなかった場合、可憐と知り合うことは無かったのだ。神崎は神崎なりに、可憐のことを考えているらしい。

「俺も賛成だ。流石に巻き込めんだろ」

あいつは一般人なのだ。非日常に巻き込まれる必要ない。神崎？ 自業自得だ。

「分かった。確かに、堕天使の力は強力だけど、宿主を殺しかねないしね……さつきからどうしたんだい、二人とも」

ちなみにだが、俺達は可憐は一般人だと、雨に何度も言っている。しかし、雨は、あのオーラは本物だ……、などと行って俺たちの言葉を信用しようとする。あ

あれ……？ 魔物の気配がしたというのも気の所為なんじゃね……？

俺の日常

「おはよう、兄さん」

朝。朝食をとつてしていると、妹が起きてくる。

「おはよ、今日はやけに遅いな？」

いつもなら、もう少し早い時間帯に降りてくるはずなのに、珍しいこともあるものだ。

「うん。ちよつと夜更かししちゃってね」

「桜が？ 珍しいこともあるんだな」

「なんだって、今年を受験だからね。頑張らないと」

妹の桜は現在中学三年生であり、今年度に入學試験を控えている。それにしても、準備が早すぎる気がする。

「まだ6月だぞ？」

「備えあれば憂い無しだよ。それより、今年も体育祭行くからね」

「なんだ、来るのか」

俺は教えていないはずなのだが、そういった情報はどこから仕入れてくるのだろうか。

「もちろんだよ。私の行きたい学校だし、兄さんの活躍も見れるし、一石二鳥だよ」
「活躍、ねえ……お前、俺の活躍じゃなくて、雨の活躍を見たいだけだろ?」

桜は雨にホの字である。気づいていないのは雨くらいなものだ。なんで、気づかないのかね、ホント。

「ふえ!!? そんなことないよ!!? ほら、去年の兄さんの人間サーフィンかつこよかったなあ」

棒読みである。しかも、目線をそらす。本当にわかりやすい。

「誤魔化すな。そして、思い出させるな」

「あははあ。それより、最近帰りが遅いけど、何してるの?」

最近は帰りが遅くなっている。まだ、桜には話していなかったか。

「いやなに、部活だよ」

「部活? あの、面倒くさがって、中学時代3年連続帰宅部だった兄さんが? 去年、何も入ってなかったのに急にどうしたの?」

何その評価。兄さんの評価低すぎない……?」

「気まぐれだ、気まぐれ」

「ふうん。それで、何部に入ったの?」

「オカルト研究部だな」

嘘は言っていない。何部と聞かれたら、オカルト研究部が一番近いものだろう。

「プッ」

笑われました。しかも、結構真面目に。

「兄さんが、オカ研？ なんの冗談？」

「何がそんなに面白いんだよ」

解せぬ。別に部活動の選択は俺の自由だろう。

「だって、兄さんはそういうの全く信じない逆の人間でしょ？ それなのにオカルトの

研究部って、なんの皮肉なの？」

確かに、俺をよく知る人物ならそう思うのも仕方ないことなのかもしれない。

「色々あったんだよ」

そう、色々……中身を言うことは出来ないが……

「ふうん。それも、雨さん関係なの？」

「そういうこつた」

本当にそういう所は鋭い。

「兄さん、昔から雨さんが関わると首を突っ込む癖があるよね。どうして？」

「どうしてって言われてもな。放っておけないんだよ、あいつは。放っておくと、何しでかすか分からんからな」

最近でいえば、神崎に転生者だと告白したのは驚いた。いや、本当に付き添って正解だったよな……

「何かしでかすかわからないのは、兄さんの方なんじゃ……」

「うつせーよ。ほら、飯食ったらさっさと出るぞ」

時計はもういい時間をさしている。そろそろ出ないと、間に合わなくなる。

「わわっ!!? もうこんな時間?!」

急いで、身支度をして、家を出る俺たち兄妹なのであった。

「よ、勇者さま」

登校中。駅をおりたところで、雨を見つける。

「おはよう、涼也。その挨拶はどうにかならないのかい?」

「今更だな。で、どうだ? そっちは進展あったか?」

あれから数日。俺も聞き込みをしていたりするが、進展はない。

「ううん、気配は相変わらさずするんだけど見つからないね。部活動生に聞き込みをしても、特に変わったことはないって言っていたよ」

雨の方も特になしか……

「なるほどな。となると、寄生型の信憑性が高いか」

「そうだね。早めに見つけないと不味いことになる」

不味いこと。それは規制主を殺さないといけなくなるということである。

「もし宿主を見つけたら、どうすりゃいいんだ？」

寄生型がいるとして、対処法を聞いていなかったのを思い出す。

「前の世界では魔法で燻り出していたね。でも、そういう系統の魔法はあまり使えないから、一定以上の衝撃を与えるのが1番の方法かな」

「衝撃？」

「分かりやすくいえば、腹パンかな？」

何それ、こわい。

「いいのかよ、それ……」

モラル的にもなんかダメな気がする。暴力、ダメ絶対。

「それ以外にもあるにはあるんだけど、やらない方がいいかな……」

「一応聞こうじゃないか」

嫌な予感がするが、予防策は聞いておくべきだろう。

「その名の通り、燻り出すんだよ。何かを燃やして煙でね」

「それ、学校でやったら問題になるんじゃない……」

良くて、停学。悪くて、警察沙汰になりかねない。

「だから、言ったじゃないか。でも、本格的に誰が寄生されているか分からない状況だと最終手段になるかもしれない。生徒全員を巻き込んでね」

「……なるほどな。そうすりゃ、最悪の事態は免れるってことか」

ただし、俺達には最悪の事態ということは変わりがない。やるなら、それなりの覚悟がいるというわけだ。

「そういうこと。その代わり、僕達は名誉ではなく、汚名を受けることになるけどね」
「笑えねえ……」

いや、マジで。

「その必要が無いように、早く宿主を探さないとね」

「そう簡単に見つかるといいんだけど……」

一刻も早く宿主を見つけなければ、相当やばい。主に俺たちの評判が。

そんなことを話していると、後ろから声がかけられる。

「涼也さん、雨さん、おはようございます」

「神崎か。おはよう」

「おはようございます、姫」

相変わらず、雨は神崎のことを姫呼ばわり。俺が雨のことを勇者というのと同じか。意味合いはだいぶ違うが……

「もう少しで体育祭ですね。進展はありました？」

「無しだ。最悪の状況を避ける手立てはあるが、まだ見つかってない」

「そう、ですか。そういえば、体育祭に保護者の方は来るんですか？」

本当に、そういえばである。

「いや、俺とこの両親は海外に出張中だから来れない。その代わり、妹が来るって言うてたな」

「涼也さん、妹さんがいたんですか？」

なんか、食いついてきた。

「うるさいのがな」

「彼女、いい子だと思っただけど？」

桜に対する雨の評価は昔からいいよな。

「確かにいい子だけど、うるさいのには変わりない」

「厳しいね、涼也は」

雨は苦笑う。

「両親がいないということとは、いつも持ってきている弁当は妹さんの手作りだったりするんですか？」

なんだ、その出来る妹は。そんな妹がこの世にいるのだろうか？

「いや、あれは俺が作ってる」

「え……？」

神崎は驚きを隠しきれていない。なんだ、失礼じゃないか……？

「涼也は昔から料理が上手いよね」

「まあな。両親の仕事の関係上、俺が作るが多かったからな。最近じゃ、あいつも作るようになったけど、任せられん」

なんか危なっかしいんだよな、あいつ。

「シスコンですか？」

「おい、神崎。俺は女だろうが容赦はしないぞ？」

何故俺がそんなレッテルを貼られにやならん。

「冗談ですよ。雨さんは？」

「僕のところは両親が来るよ。姫のところは？」

「私のところは来ませんね。お二人共、お忙しいですから」

神崎の両親といえば、神崎財閥のお偉いさんか。忙しいというのも納得出来る。その表情は、心做しか寂しそうに見えた。

「おい、風鳴。聞いたぞ？ お前、神崎さんと一緒に昼飯食ってるんだって？」

昼休み。鞆から弁当を出して、昼飯の準備をしていると、A田から話かけられる。

「それ、どこで聞いた……?」

嫌な予感がした。神崎はこの学校のマドンナ的存在だ。そんなやつと仲睦まじく、昼飯を食ってるなんて知られたら、嫉妬の嵐に巻き込まれかねない。

「そりゃ、男子の中では有名だぜ? ついでに、1年の女子も侍らせるとか。今男子で殺したいランキング1位だぞ、お前」

「なんだそのクソツタレなランキングは。てか、雨も一緒なんだが、雨はどうなんだよ?」

「そうだ。雨も一緒に飯を食っているのだ。俺だけ死ぬなんて、認めなてなるものか。」

「ランク外だ。鈴童と神崎は美男美女だし、一緒にいても嫉妬の対象にはならねーよ。むしろ、絵になるしな」

と、B村。

解せぬ……

「てなわけで、覚悟しろよ?」

と、C谷。

「どういふことだ?」

俺は弁当を手に持ち、後ずさる。

「お前をぶつ殺す!!!」

この世は非情であった。俺は全力で逃げる。こんな所で殺されてなるものか。

「む? どうしたのだ、先輩」

逃げていると、よく知る後輩に出くわした。

「可憐か。いやな、馬鹿共に追われてるんだよ」

「馬鹿共……? 何をしでかしたのだ?」

なんで、俺がなにかしでかした前提なのだろうか。まだあつて2ヶ月しか経ってないのに、こいつの中の俺のイメージはどうなっているのだろうか?

「なんにもしてねーよ! お前一人か? ちょうど良かった。飯行くぞ」

「え? お昼ですか?」

何をそんなに驚いているのだろうか?

「それ以外に何かあるんだよ? このままじゃ、便所飯確定だからな。屋上は見張られてるだろうし、中庭に行こうぜ」

「あう……分かりました」

てなわけで、中庭に移動。後輩といえるのに邪魔をしてくる馬鹿はいないと思いたい……

2人で昼飯を食べているのだが、可憐はずっと俺の弁当を見ている、ように見えた。

「ん？ どうした？ 卵焼きでも欲しいのか？」

「え？ あ、いえ、欲しいです」

やっぱり、弁当を見ていたのか。

「美味しい……」

「そりやよかった」

作った甲斐があつたというものだ。やはり、誰かに美味しいと言ってもらえるのは嬉しい。

「あの……先輩達はどうして私に構ってくれるんですか……？」

「どうした、急に？ らしくないな」

こいつ、急にどうしたのだろうか。何かあつたのか？

「私らしい……ですか……私らしいって何なんですかね……？」

本当にどうしたこいつ。熱でもあるのか？

俺はロマンチストでは無い。気の利いた返事なんて返せない。

「知るかそんなの」

「えっ!？」

予想外の返事だったらしく、可憐は目を丸くする。

「そうさな。今の俺の中のお前は、偶にしおらしくなる、うるさいくて可愛い後輩だ。だ

けど、俺はお前を知ってまだ2ヶ月くらいだ。お前の思うお前らしいと俺の思うお前らしいは齟齬が出るだろうよ」

「え、あの……?」

今度は顔を朱に染める。面白いな、こいつ。

「人がその人らしいっていうのは、確かに他人が決めることだ。だけど、自分がどうありたいって言うのは、自分で決めることなんじゃないか?」

そう。他人の評価なんて気にするものではない。自分がどう行きたいか、それが大切なのだ。現代の日本では、それが難しいというのもあるが、自分の生き方を否定してまで、他人からの評価を得る必要なんてない。生きているのは本人だ。他人に迷惑をかけるのならば、生き方なんて自由である。

「……そう、ですね。ありがとうございます。やっぱり、先輩は優しいですね……」

「俺が優しい? 冗談だろ?」

「そんなことないですよ」

可憐の暗い表情が少しだけ明るくなった気がした。

「ちなみに、さっきの答えだけだな。お前に構うようになったのは成り行きだ。だけど、今は俺がしたくてやってる。これでいいか?」

「変な人ですね、先輩は」

「ああ、よく言われるよ」
ただの一般人なのにね。

そして、放課後。俺はオカルト研究部がある、倉庫に向かうのであった。

体育祭とボヤ騒ぎ

「選手宣誓!! 私たち、選手一同は——」

選手宣誓高らかに、体育祭が開催した。

「よっしゃあ!! 紅組勝つぞおおー!」

「おおおおつ!!!」

皆さん、凄いノリノリである。俺はこのテンションについていけないでいた。

さて、この体育祭。何故こんなにも盛り上がるのかという話である。学校にもよろだろが、体育祭なんて1行事、1通過儀礼と考え、あまり盛り上がるということは少ないだろう。別に、サボってもいいんじゃないかね? と思うこともあるだろう。しかし、この学校ではそれが無い。

と、いうのも、MVPのクラスには学食1ヶ月無料券が配られるのだ。

もので釣っている、といえば聞こえは悪いが、実際盛り上がってしまったっているのだから、効果は上々だろう。ちなみに、学食無料券はデザートにも使えるため、うちのクラス的女子は血眼になって狙っているようである。

「おい、風鳴。どうしたんだ? アゲアゲで行こうぜ?」

「心配するな。テンションMAXだ」

しかし嘘である。テンションなんて、上がる気がしない。

そう、今日は体育祭当日。結局、魔物が帰省した宿主を見つけることは出来ず終いでここまで来てしまったのだ。となれば、やらないといけないことはひとつ。その事を考えると、頭が痛くなる。

例の計画を実行するために、雨は別行動。現在、おそらく準備倉庫で支度を始めていることだろう。準備係を任されて良かった。

「んじゃ、俺は役員の仕事があるから行くぞ」

「あいよ。お仕事頑張れよー」

やる気のない応援を受け、俺は準備倉庫に向かう。

「仕込みの方はどうだ？」

「うん、順調だよ」

準備倉庫の奥、換気口の真下に準備されていたのは枯れ草の山だった。この量、どこで仕入れたのだろうか。

「こんなので、炙り出せるのかよ？」

これを焼いたところで、煙たく感じるのが関の山だろう。こんなので、魔物を燻り出せるとは到底思えない。

「この中には、いくつか魔物が嫌う薬草を混ぜてる。入手は大変だったけど、間に合つてよかつたよ」

なんか、すごい気になる単語が聞こえた。

「入手が大変だったって、やばい薬草でも入ってるのか……？」

「基本的には人体には無害だよ。ただ、普通に売っていることがないものだから、自分で取りに行くハメになってね」

雨は苦笑する。

「なるほどな……」

通りで、所々に擦り傷が出来ているのか。そんなに大変だったのなら、一言いってくれれば良かったものを。

「それで、いつ実行するんだい？」

「本当なら今すぐにでもやった方がいいんだろうが、体育祭が中止されかねん」

一応、この体育祭を楽しみにしている生徒は沢山いる。観客だってそうだ。それを、俺たちの都合で中止にしてしまうというのは、傲慢だろう。

「ということは、閉会式かな？」

「それがいいだろ」

それに、体育祭はほぼ全員参加だ。一齐に生徒を見ることが出来る。もしかすると、

最終手段を見つける前に、宿主を見つけることが出来るかもしれない。

「ま、とりあえず、今は体育祭の仕事に専念だな」

「それもそうだね」

紛いなりにも、俺達は役員である。指示された仕事はこなさなければならぬだろう。

午前の部は何事もなく終わり、休憩タイム。神崎が種目に出ていたが、特にこれといった成果はなかったため、割愛しておく。割と、凹んでいた、とだけ述べておく。

「兄さん、こっちこっち」

出迎えてくれたのは、桜と雨の両親だった。

「お久しぶりです、おじさん、おばさん」

「まあまあ、大きくなったわねえ」

「あんなにちつきかったのになあ！」

それ、去年も言っただけだったか……？

毎年事あるごとに会っているのに、毎回こんな感じである。

「うわあ……綺麗な人……」

桜はというと、目を見開いて口を開けていた。

「そういや、お前は初めてか。神崎だ。んで、こっちは妹の桜」

「神崎玲奈です。よろしくお願いしますね、桜さん」

「は、はいです！ よろしくお願いします、玲奈先輩！」

なんか、桜のやつ凄いキョドってるな。なかなか珍しいものが見れた。

そして、食事。俺が昨日作っておいたものと、雨の両親が作ってきたものを合わせて食べる。

「それにしても、私までよかったのでしょうか……」

申し訳なさそうにする、神崎。

「気にすんな。飯は大勢で食べた方がうまいだろ？」

「そうですよね……ありがとうございます」

神崎は微笑む。親の都合なら仕方がない。さすがに、知ってて一人で昼食を取らせると訳にもいかんだろう。

「そういえば、私の1年上の先輩もこの学校なんだよね」

「そうなのか？ この学校、人が多いから多分知らんだろうな。一応聞いてみるけど」

そもそも、下級生なんて、1人しか知らない。それなのにドンピシャで知っているとは到底思えない。

「藍白っていうカッコイイ女の先輩なんだけど、知ってる？」

はい、ドンピシャ。世の中は狭いですね。

「む、私の名が呼ばれた気がするが?」

そして、何故お前がここにいる!?

まあ、呼びに行こうと思っていたからちようどいいか。

「可憐先輩! お久しぶりです!」

桜は嬉しそうに可憐に抱きつく。

「なんだ、サクラか。しかし、何故……」

「こいつ、俺の妹だぞ? ていうか、苗字から分らなかったのかよ……」

はてなマークを浮かべている可憐に答えをぶつける。

「先輩ではないか。こんな所でどうしたのだ?」

「見てのとおり休憩中だ。お前はどうしたんだよ」

「なに、我も1人になりたい時もあるのだ」

可憐は、ふん、とそっぽを向く。あらかた、俺たちを探していたのだろう。

「ふうん。ほらよ」

クーラーボックスから、ゼリーをひとつ取り出し、可憐に手渡す。

「——っ!? これは?」

「デザートだ。余ってるからやるよ」

というのは本当。俺たちの部活の人数分、そしてその保護者分も作ってきていたため、割と余ってしまっている。余った分は食べればいいから問題ない。

「……ではいたどころ」

クールぶってるけど、口元がニヤついていますよ、可憐さん。

「兄さん、可憐先輩とどういう関係なの？」

桜がジト目で聞いてくる。

「どういう関係ってどういうことだよ？」

先輩と後輩の関係以外に何があるのだろうか。

「だって、下の名前で呼んでたじゃん」

そういうことか。我が妹も女子ということだろう。本当に、こういう話好きだよな。

「気まぐれだよ。にしてもどうしたんだよ、元氣ないな」

元氣がない、と言うよりも無理をしているという表現の方が正しいか。

「あれ、そう見える？」

「バレバレだ。どうかしたのか？」

「うん……雨さんの視線がちよつとね……」

可憐は雨と神崎を交互に見る。現在、神崎と雨は雨の両親と話している。ちなみに、可憐はデザートに夢中である。

「やっぱり、わかるか」

「分かるよ。雨さん、玲奈先輩をとつても愛おしそうに見るんだもん……妬けちやうな……」

哀しそうな、寂しそうな顔をする桜。

「心配すんな。お前の思っていることにはならんだろうよ」

「え？ どういうこと？」

桜はキョトンとする。

「禁則事項だ。さてと——」

俺は席を立つ。

「あれ、どうしたの？」

「トイレだトイレ」

そう言い残して、校舎の方に向かう。目的地はトイレではなく、校舎の陰。そこに、スーツ姿の女性が隠れていた。

「あの……もしかして、玲奈さんのお母さんですか？」

その容姿は、神崎をそのまま大人にした感じだった。まさに、絶世の美女というのはこのことなのだろう。

「……どうしてバレたのか聞いても？」

「そりや、あんなに娘さんを見てればバレますよ。それに似てますし。行かなくてもいいんですか？」

あれで隠れていたつもりだったのだろう。それよりも、こんな所にいても仕方が無いのではないか。しかし、何故こんな所に隠れていたのだろう？

「ええ。本当は出ていこうかと思つたのですが、少し予定が変わりまして……」

目下の人間にも敬語を使う神崎母。なんていうか、こういう人が人の上に立つべき人なんだろうと考えてしまう。

「もしかして、玲奈さんが俺たちと居たからですか？ すみません……」

もしそうならば、悪い事をした。

「違います違います。そういう訳では無いのです」

しかし、違つたらしく、神崎母は慌てて訂正する。なんか、本当に神崎によく似ている。いや、神崎がこの人に似ているのか。

「ところで、玲奈と一緒にいる方のことを聞いても？」

「雨ですか？ 同じクラスの同級生ですよ。どうしたんですか？」

何故、雨なのだろう。イケメンだからか？ いや、流石にないだろう。と思つた矢先、その目線は雨が神崎に向けるようか目線を雨に向けていた。

なにぞとっ！？

「……いえ、なんでもありません」

ふと、我に返ったのか慌てて訂正する。

「では、失礼しました。娘をよろしくお願ひしますね」

ぺこりと頭を下げて、彼女は去っていったのだった。

『障害物競走に参加する選手はゲートに集まってください』

午後の部。とうとう、最凶の時間が始まるうとしていた。

「フッフッフ、ついに我の出番のようだ」

その全貌を知らない可憐は意気揚々としていたのであった。

選手が登場したところで、ルール説明がある。障害物の内容は、ネットや平均台など、途中までは普通の障害物競走とかわらない。しかし、後半に待ち受けるのが、ローションまみれの坂。こいつのせいで、色々ぶち壊しなのだ。

説明を聞いた女子参加者は全員顔を青くしている。ちなみに、男子は多様である。

そして、無慈悲にレースは始まり、とうとう――

「お、可憐の番だな。しかし、大丈夫か、あいつ？」

あいつの運動神経はよく知らないが、心配になる。一応あいつも女の子なわけだし、

ローションまみれというのも頂けないだろう。

「気に召さず、トラックを破壊してしまわないといいけど……」

俺と雨では心配のベクトルが違いすぎた。

「あ、コケたな」

可憐は滑つてダイナミックに転ぶ。

「あれは誰でもコケるよ……」

ていうか、みんなコケてる。

「誰だよ、あれを認めたの」

なんで、こんな狂気を取り入れたのだろうか。正気の沙汰とは思えない。絶対、これ

考えた奴はローションまみれの女子高生を見たかっただけだろ……

眼福ではあるのだが。

「私だが？」

会長かよ……どこから現れたんですかね……

「あの、参考までに、なんで認めちゃったんですかね……」

「なに、駄洒落だよ。学校生活が円滑に行けば良いと思つてな」

うわあ……くっだんねえ……

俺と神崎は失笑する。

「さすが会長です」

そんな俺の隣で目を輝かせている雨。こいつ、頭のネジをどこに忘れてきたのだろう。前世か？

「今度は巻き込んでコケましたね……」

なにこれ、人間関係ドロドロになりかねないよ。本当に見てられないよ？

しかし、これがまた観客をヒートアップさせている。障害物競走は男女問わず、最初から最後までヤジがすごかったです、まる。

「せんぱああああい!!」

種目を終えた可憐が涙目で走ってくる。

「あんま近づくな。汚れるだろうが」

俺までローション塗れになるのは御免蒙りたい。軽いチョップで牽制する。

「あうう、痛い……じゃなくて!! どうして、障害物があんなのだから教えてくれなかったんですか!!」

グイグイ、と可憐が近づいてくる。

「だってお前、教えてたらバツクれただろ？」

「ぐぬぬ……確かにそうですけど……」

悔しそうに拳を握る可憐。

「それよりもお前、さっさとシャワーを浴びてこい。目のやりどころかに困る」

こいつの体操着、ローションのせいで体に張り付いて、ボディラインがしっかりと出てしまっている。下着も軽く透けているし、本当にけしからん。

「え……？ ——っ!? どこ見てるんですか!?!」

今更気づいたのか、可憐は顔を赤くし、その場にしゃがみこむ。

「だから、言ってるだろうが。わかったら行ってこい」

「お、覚えておいてくださいね!!」

捨て台詞を吐いて、てくてくと走っていく。

おっと、忘れていた。

「あ、そうそう。可憐」

「……なんですか?」

ピタ、と止まり振り返る。

「カツコよかったぞ」

「……当たり前です!!」

ふふん、と笑う彼女の笑顔はとても満足気であった。

さて、体育祭の機材運びは割と大変である。その仕事もひと段落つき、俺と雨は中庭でお茶を飲んでいる。

「手伝いはいるとはいえ、なかなか大変だな」

「そうだね。去年僕は手伝いだったからそうでもなかったけど、上になるとこうも大変とは思わなかったよ」

とはいえ、雨のリーダーシップはなかなかのものであった。これも、雨の人望がなせる技なのであろう。

残る種目もあと僅か。このまま何事もなく、体育祭が終わってくれば良いのだが……いや、そもそも、何事もなくというのはおかしいか。事件起こす予定ですし。

「なあ、雨。あいつ、こんな所で何してんだろう？」

目に映ったのは、1人の男子生徒。目の焦点があつていなく、どこか虚ろである。前のめりになりながら、どこかに歩いていつている。まるで、ゾンビのようだ。

「二応聞いてみるが、アレ、違うか？」

「……宿主で間違いないと思う。まだ、ぎりぎり救えそうだけど、症状が思ってたよりも進んでるね……」

偶然ではあったが、見つかってよかった。

「末期ってやつか……やるしかないか」

「そうだね」

対処法は以前聞いた。腹を思いつきり殴る事。つまるところ、腹パンである。

「追うぞ」

「了解」

俺達は宿主を追う。そして、学校裏。定番の不良は居ないようである。

「おいおい、なんで可憐がこんな所にいるんだよ」

そこではあろう事か、宿主と可憐が対面していた。

「いくぞ、雨」

「あ、あれ……？ 魔物の説明はいいのかい？」

そんな場合ではない。既に、宿主は、右腕を振りかぶっている。

「そんなもん後だ」

今は後輩を助けることが優先なのだから。

「恨みはないけど、失礼するぞ」

宿主の背後から思いつきり回し蹴りを決める。蹴り飛ばされた、宿主は少しだけ跳んでいき、地面を舐めた。間髪入らずに、仰向けにして思いつきり腹を殴る。

すると、口から何か黒いウネウネした、固形物の物体が出てきた。見ていて、嫌悪感を抱くというのはこの事だろう。

「しまっ——」

身震いしていると、そいつは準備倉庫の方に逃げた。雨は既に追いかけているが、なかなか素早いようである。

俺もすぐに後を追いたいだが、そういう訳にも行かないだろう。一旦あいつに任せるとする。

「せ、先輩……?」

可憐は青白い顔でこちらを見上げている。

危機一髪と言ったところだろう。怪我がないように何よりだ。

「おう、無事か?」

「は、はい……」

まだ、恐怖が残っているのか、震えている。あの宿主の顔、俺から見ても中々ホラーだった。目の当たりにして、暴力を振るわれそうになれば、こうなるのも当然だろう。

「立てるか?」

「いえ、あの……すみません……」

珍しく、申し訳なさそうにする。どうやら、腰が抜けて立てないらしい。

「ほら。乗れ」

可憐に背を向け、しゃがむ。

「え……でも……」

「これ以外に方法が思いつかん。なんなら、お姫様抱っこしてやろうか?」

お姫様抱っこされるより、おんぶされる方がマシだろう。ていうか、お姫様抱っこなんて、したくない。している所なんて見られたら、死にたくなる。

「……分かりました。妥協します」

可憐を背負い、神崎の元に運ぶ。

「んじや神崎、あとは頼む」

可憐を神崎に預け、軽く、なんとなく、可憐に悟られないように説明をする。

「そういうことでしたら、任せられました」

そういうわけで、準備倉庫へと向かう。もしかすると、雨がもう終わらせているかもしれない。と思っていたのだが、その男は建物の陰に隠れていた。

「雨、どうなった?」

「ほら、あそこ。ここまで来る途中に人がいなくて良かったよ。また寄生されると厄介だからね」

準備倉庫の横に、黒い物体がある。寄生魔である。

「なんで出ていかないんだ?」

「あの状態の寄生魔は素早いからね……獄炎魔法でもあれば、直ぐに燃やせたんだろう」

けど……範囲魔法は使えないからね……」

何その魔王が使いそうな魔法。怖いんですけど……

つまるところ、範囲でごり押すか、正確に決めるかなのだろう。勇者なのに前者を選ぶのかよ……

「つまり、動きを緩めりやいいんだろ？」

そうすれば、こいつはアレを燃やせるわけだ。

「どうするつもりだい？ まさか……」

「無論、誘い込む」

簡単だ。あいつは宿主を探しているんだから、その方法が手っ取り早い。

「止めてもやるんだよね？」

「おう、止めるだけ無駄だ。お前は燃やす準備をしとけ」

「分かった。任せるからね」

話は決まった。俺は寄生魔の前に出る。すると、突然俺向かって前進してきた。しかも、相当速い。そして、キモイ。

「させるかよっ!!」

俺の口にダイブし、迫ってくる寄生魔を思いつき殴り飛ばす。

「雨、燃やせ！」

「任されたよ！」

そして、雨の魔法により引火。そのまま、寄生魔は灰となるはずだったのだが――

「あ……」

火達磨になったまま、宙を飛んでいた寄生魔は、準備倉庫の換気口の中へと入っていったのだった。

そして、その中にあるのは、大量の枯れ草。もう、言う必要も無いだろう？

この日、体育祭は中止になりました。

BlueなBrave

体育祭から数週間。あのボヤ騒ぎは不慮の事故として扱われ、俺たちに責任が追求されることは無かった。なんでも、生徒会長が手回しをしてくれたらしい。

まことしやかに、俺たちの犯行だと言っている生徒もいるようだが、俺たちがボヤ騒ぎを起こす必要性については、表向きには皆無なため、表には浮上してきていない様子である。

そして、放課後の倉庫。

「まずいよ、涼也…………どうしよう…………あははは…………」

雨は顔を青くし、頭を抱えていた。本当にどうしようもないのか、変な笑いまでこぼれ出している。これは怖い。

「ど、どうしたんですか？ 雨さん？」

雨の動揺は誰が見ても明らかである。神崎は心配そうに俺に聞いてくる。

「あ……………そういえば、そういう時期だったな」

もはや、毎回恒例である。初めの頃は本当に心配したが、もう慣れた。

「そういう時期…………？ まさか、転生の代償が…………？」

なんだ、その設定は……初めて聞いたぞ。そもそも、そういうことがあるならば、初めから神崎に伝えていたことだろう。

「そんなのないない。雨があんな状態なのは、そういうのじゃなくて、雨個人の問題だ」
「雨さん個人の……？」

まるで分からない。そのような表情だ。簡単に答え合わせと行こう。

「そうだな。次の学校行事といえど何がある？」

「学校行事ですか？ 体育祭は終わりましたし、夏休みですか？ 定期試験の後は、これと言ったものはないと思いますが……」

これは惜しい。答えは言っているのに、答えが間違っている。

「それだよ、それ。期末テスト」

「え？」

予想外だったのか、ありえないという表情の神崎。あいつが成績優秀とでも思っていたのだろうか。

「あいつ、相当馬鹿だぞ？」 雨は基本的に英語と数学以外出来ないからな」

そう。あいつは、勉強ができない馬鹿なのである。英語と数学以外は基本的に赤点。英語と数学ができる理由は、魔法を使うにの必須スキルだからだとかなんとかか。

「ほう、それは意外だな。我はてつきり、先輩のことは文武両道だと思っていたぞ」

それはおそらく、うちの学校のほとんどが思っていることだろう。うちは成績の開示がないから、その事実を知っているのはほんのひと握りだけだ。

「可憐、そういうお前はどうかなんだよ？」

「我が策略にいっぺんの曇もない」

腕を組み、自信満々な様子。

「「どんな策略か聞いておこうか？」

「カンニ——ふぎやつ!？」

軽くデコピンを御見舞しておく。こいつは、何をしでかそうとしているのだろうか……

「それはアウトだ。馬鹿野郎」

「冗談だったのに……」

それが冗談なのかどうか、というのは本人にしかわからないこと。可憐はデコを抑え、涙目になっていた。

「どうしよう……本当にまずい……みんなより少し出来ないくらいなのに……」

さて、話を戻そう。勇者様は、赤点の危機である。

「いやお前、少しどころの騒ぎじゃないだろ。こつちの世界で何をやってたんだよ」「勉強はしているつもりなんだけどね……」

「やってるのは知ってるけどな」

そう、勉強をしているのに結果が伴わない。なんとも不憫なのだ。

「涼也、また勉強を教えてくださいませんか？」

「それくらいは構わんぞ。いつもの事だし」

「これはいつもの流れだ。」

「あ、それなら勉強会とかどうです!？」

閃いた、とばかりに可憐が提案をする。なんとなく、目が輝いているように見える。

「勉強会? どこでやるつもりだよ?」

「先輩の家、とか?」

場所については何も考えていなかったらしい。

「なんで俺の家なんだよ……」

別に両親は海外に出張中だし、問題ないことにはないが、別に俺の家に集まる必要性はないだろう。

「桜にも会いたいですし?」

「何故疑問形……? ここはどうなんだよ?」

集まるのならここでもいい。余計なもの(神崎のコレクション)はあるが、勉強するにはいい環境であることは間違いないだろう。

「ここだと、泊まらないじゃないですか!!」

「泊まる気満々なのか!？」

「どうやらそれが本音らしい。おそらく、ここに泊まることも出来なくはないのだろうが、それだと神崎に負担をかけることになるだろう。」

「勉強会といえば、醍醐味でしょ!!」

「そんな醍醐味聞いたことない。こいつ、お泊まり会をやってみたかっただけなんじゃないか……?」

「勉強会……なんだか、楽しそうですね」

「神崎もノリノリである。もうこれは、俺の意見が通りそうもない。」

「おい神崎?」

「涼也さん。お世話になりますね」

「もう勝手にしろ……」

「勉強会当日。俺は台所に立ち、昼の支度をしていた。」

「兄さん、部屋の準備出来たよー」

「サンキューな」

「使われていない空き部屋にある程度の家具を運び込んでいたので、桜にはその掃除を

してもらっていた。雨は俺の部屋で寝ればいいが、神崎と可憐はさすがに無理である。桜の部屋という手段もあったが、3人で寝るには狭すぎた。

「それにしても、雨さんがうちに来るのっていつ以来かな?」

「さあな。去年の期末テスト前が最後じゃなかったか?」

もはや、俺が雨に勉強を教えるというのは、毎回恒例である。

「あー、そうかも。可憐先輩も来るんだよね?」

「言つたら? 部活のヤツらが全員来るって」

「じゃあ、玲奈先輩も……?」

桜は瞳に不安をあらわにする。

「なんだ、心配なのか?」

「だってだって、これを機会に二人の仲が深まっていくんじゃないかって……もつと、アタックした方がいいのかな……」

それは無いと伝えたはずなのだが、やはり心配なのであろう。

「お前が納得する行動を取ればいい。にしても、あいつのどこに惚れたんだよ」

それは気になる所である。桜は気付いた時から雨に気があるようであった。何かきつかけになるような事があつたのだろうか。

「それは……誰に対しても優しいところ、かな?」

「ベタだな」

なんともテンプレである。あいつは、誰に対しても優しい。それはおそらく、あいつのことを知っている人物なら誰でも知っているだろう。だからこそ、人気がある。八方美人といえ、聞こえは悪いが、そんな人間はそうはいないだろう。

「わ、わるい!?!」

「別に悪いなんて言っていないだろ」

人が人に惚れるなんていうのは、優しいの一つだけでも十分なのだろう。ベタだが。

「兄さんはさ、雨さんのことどうおもう?」

「どうつて? 別にお前と雨が付き合うのに文句は言うつもりはねえよ」

雨が俺の義理の弟になるというのは、それはそれで面白い。

「どうしてそうなるの!?! 違う違う、友人としてだよ」

桜は慌てて訂正する。

「なんだ、そういうことか。そうさな……あいつは、誰に対しても優しいが、それと同じくらい危なっかしい」

自己犠牲の精神。あいつは、もともと勇者であったためか、他人に対して全力を尽くす。他人にとっての最良を尽くす。だが、その勘定に自分というものは入っていないのだ。これが、あいつの優しさの本質である。

「兄さんもそう思う？」

これは驚いた。桜がそのことに気がついているとは思っていなかった。

「なんだ、気づいてたのか」

「うん。雨さん、他人には優しいのに自分のことに関してはずつごく疎いんだよね……だから、心配っていうか……一緒にいて支えてあげたいって言うか……」

桜は頬を朱に染める。その表情はまさに恋する乙女である。

雨のその一面を知っているということは、なにか決定的な出来事があったということだろう。もしかすると、それがきっかけなのかもしれない。

「何があったのかは知らんが、お前がしたいようにすればいい。誰も文句は言わんさ」

その事を知っていてなお、好きであると言えるのであれば、もはや何も言うことは出ないだろう。

「そういえば、すごい気になってたんだけど、兄さんはなんで雨さんと仲良くなったの？」

なんとなく、というのは簡単である。しかし、別に濁す必要も無いだろう。桜も打ち明けてくれたのだ、それに見合うくらいの返事はしなくてはならないだろう。

「そうだな……あいつは、俺の知っている誰よりもまっすぐで、誰よりも強くて、誰よりも馬鹿だ。惚れたんだよ、そんな男に」

初めて見た時のあいつの瞳。その目は生涯、忘れることは出来ないだろう。

「え……兄さんまさか……そっち系？」

「よーし、喧嘩を売ってるなら買うぞ？」

何故そうなる。俺はノーマルだ。

「冗談だよ、冗談。あ、みんな来たみたいだよ！」

タイムリングを見計らったかのように、チャイムが鳴ったのであった。

異世界の事情をこの世界に持ち込むな！

「おい、雨。言い訳があるなら聞こうじゃないか」

勉強会初日。神崎は成績優秀のようで、教える側となっている。

とりあえず、雨がどこまで勉強ができるのか、ということ以轻いテストを行った。そして、現在は世界史。

「え？ なんのことだい？ しつかり回答はしてあると思うんだけど？」

確かに回答は書いてあり、空白はなかった。しかし、その回答が珍回答の連発であったのだ。

「その回答が問題なんだよ。1914年の出来事が、ヴェルナジア平原の戦いつてなんだよ？ ていうか、ヴェルナジアってどこだよ」

俺の記憶が正しければ、この世界のどこにもヴェルナジアなんて地名はなかったはずである。ちなみに、答えは第一次世界大戦勃発である。

「あれ……？」

「あれ？ じゃねーよ。お前まさか……」

この世界にはないが、雨の知っている歴史。それは、雨の前世の歴史である。

「あはは、どうも混ざってるみたいだね……」

「お前な……」

頭が痛い。これは、前途多難である。

「ヴェルナジアの戦い? 聞いたことがないな」

中二心が燻られたのか、可憐が首を突っ込んでくる。

「そりゃ、雨が適当に書いたやつだからな」

適当という訳では無いが、誤魔化しておく。

「ふむ。なかなか燻られるな……」

彼女は中二病全開でククク、と変な笑い方をする。

「涼也! まずいよ。彼女、戦いという言葉に高揚してるようだよ!」

雨は冷や汗を流す。こいつ、本当に純粹だよな……

「安心しろ。大丈夫だ」

「え、でも……」

「ほっとけ。それじゃ、続きやるぞ」

焦っている雨を制止しながら、勉強を続けた。すごく大変でした。

「もうこんな時間か。飯作ってくるわ」

時間は18時。そろそろ、夕飯の時間だろう。

「それなら私もお手伝いします」

「いいのか？ んじゃ、頼む」

元々1人で作る予定だったため、手が増えるというのは嬉しいことである。

「兄さん、何作るの？」

「この人数ならカレーでいいだろ。定番だし」

材料は予め用意してある。カレーが嫌いという人間はそうはいないだろう。

俺と神崎はキッチンへと移動し、サクサクと作業を進めていく。神崎はうちのキッチンの配置を把握するや、テキパキと仕事をしてくれた。

「お前、料理なんてできたんだな」

意外や意外。お嬢様である神崎は料理ができたのだ。お嬢様つて料理できないイメージがあつたのだが、それはサブカルチャーの影響が強いらしい。

「涼也さんには劣りますけどね」

神崎は苦笑する。別に料理なんて出来るか出来ないかの二択である。優劣をつける必要性なんてない。

「世事はいい。勉強会はどうだ？」

「とつても楽しいです。こういうのは初めてですから。迷惑ではなかったですか……」

？」

不安そうに俺の顔を見る。

「別に迷惑とは思ってない。桜も喜んでみたいだしな」

「こんな大勢で勉強会兼、お泊まり会をする機会なんてそうはなかったから、軽くはしゃいでいたのを思い出す。」

「やつぱり、シスコンさんなんですか？」

「それは否定する。それより、勉強の方はどうなんだ？」

「どうして、俺がシスコンという結論に結びつくのだろうか。」

「ええ、可憐ちゃんも桜ちゃんも熱心に聞いてくれるのでやり甲斐がありますね。雨さんは……」

「皆まで言わんでもわかる……よく2年になれたと思うからな……」

「本当に、よくあいつは進級できたよな。」

「前世の記憶に囚われているという部分もあるにはあるんでしょうね……」

「だろうな。初めて科学を教えた時は相当骨が折れたよ」

何を教えても、それはありえないよ、の一点張りだった。魔法が発展していると、科学が衰退するというのは本当のようで、科学に関してはとても否定的であった。今でも、苦渋を舐めているようである。

「涼也さんはなぜ雨さんと?」

「なんだ、今日はよく聞かれるな」

今朝も桜に聞かれた。男同志の仲というのを知ったところで何になるというのだろう。

「そうなんですか?」

「別にいいけどな。男の友情ってやつだ」

嘘は言っていない。友情がなければ、俺は雨と関わりを持つていなかっただろう。

「友情、ですか……?　なんか、誤魔化してません?」

神崎はジト目で俺を見る。

「ないない。そういや、体育祭の日、お前の母親に会ったぞ」

言つてよかったのか、というの微妙なラインではあるが、話題転換のために使わせてもらう。別に、秘密にしておくと年を押しされた訳でもないし、問題は無いだろう。

「え……お母様にですか?　来ていてくれたんですね」

笑みが綻ぶ。その笑顔に少しだけ見とれていた、というの秘密である。

「なんか急用があつたみたいで直ぐにどっかに行つてしまつたけどな」

本当になんだつたんだらう。雨が気になつてみるみたいだったし……

「そうなんですね。私の母親だとよく分かりましたね?」

「そりゃ、そつくりだからな」

神崎を知っていて、あの人物を母親だと思わない人間はそうはいないだろう。

「そう言つて貰えると嬉しいです。お母様は私の憧れですから」

やはり、神崎玲奈という人間は少なからず、その母親から影響を受けているらしい。

「ほーん」

「なんですか、その興味無いみたいな返事は?!」

興味無いということはないが、別に家庭の事情やらを知ろうとは思わない。

「事実ないからな。なんだ、聞いて欲しいのか?」

「別にそういうことではないですけど……」

神崎は言い淀む。

「ならいいだろ。ほら、運ぶぞ」

適当に盛りつけをした皿をキツキンから運び出す。

「なんだか、納得がいきません……」

不満を吐きながらも、手伝つてはくれるお嬢様ではあった。

就寝前。俺と雨は、俺の部屋で寝る準備をしていた。のではあるが――

「どうして俺の部屋に集まる……」

何故か全員が俺の部屋に集まってきたのだ。

「いやあ、だつて、ねえ？」

桜は目を逸らす。どうやら主犯は神崎のようである。

「すみません。なんだか、テンションが上がってしまい……あ、これ差し入れです」

神崎は高級そうな包装をされたチョコレートを出してくる。実際、高級なんだろう。

「クク、我が来てやったのだ。歓迎するといい」

風呂も入り、いつもつけている包帯は外しているが、眼帯だけは外していない可憐は、いつも通り偉そうであった。

「お前は帰れ」

可憐を部屋からつまみ出し、扉を閉める。

「じ、冗談ですよ先輩！ 入れて、入れてください！ 入れてえ!!」

その夜、悲痛な叫びが風鳴家に響き渡ったとか、渡らなかつたとか。

ちなみに、近所迷惑にならないよう、直ぐに部屋に入れました。

「雨さんと涼也さんって、幼馴染なんですよね？」

初めは学校生活だったり、他愛のない話だったりが続いていたのであるが、いろんな話が重なり、俺と雨の話になっていた。

「そうだね。知り合ってからかれこれ14年くらいになるかな」

時の流れというのは早いようで、雨と知り合ってからとても長い時間が経っていた。

「もうそんなになるのか。お前、あの時から変なやつだったよな」

初めて会った時のことは、今でも忘れられそうにない。

「う……それは言わないで欲しい……」

雨は恥ずかしそうにする。今でも変だけどな。

「それを言うなら、兄さんも十分変人だから」

我が妹は、俺になにか恨みでもあるのだろうか。

兄さんのハートに鋭い刃が突き刺さったぞ。

「悪かったな変人で」

「桜ちゃん。涼也先輩と鈴童先輩って、どんな子供だったんですか?」

おそらく興味本位だろう。

「んー、今と変わらず、兄さんはリアリスト、雨さんはロマンチストでしたね?」

俺は確かにそうであると自覚しているが、雨をロマンチストというのは少し違う気がする。確かに正反対ではあると思うのだが、どうも言い表すことが難しい。

「涼也先輩、そんな昔からリアリストだったんですか?」

リアリストな子供なんて可愛くない、とでも言いたい顔で俺を見てくる。

「あの……それは、私のせいでもあるんです……」

可憐の反応に、桜は目を伏せる。

「私たちの両親は昔から家を開けがちでしたから、兄さんは一人で私の面倒を見てくれていたんです……だから、兄さんは現実のみを見るようになったんだと思います……」

なんだ、それは……

どうやら、桜の妄想が爆発しているらしい。

「そう、だったんですね……」

「先輩、可哀想……」

話を真に受けたくらしく、捨てられた子犬でも見るような目で、俺を見てくる女子共。

「ええい、勝手に決めつけるな！」

「え、違うの？ 私のイメージじゃそうだったんだけど。なんでなの？」

我が妹ながら恐ろしい。なんで、そんなことを思いつくのだろうか。

確かに、その理由も多少はあった。だが、それだけではない。それは桜も、雨でさえ知らないこと。それを打ち明けることは、この先あるのだろうか。

「さて、なんでだろうな」

「あ、ズルいです！ ここまで話しておいて、隠すなんて卑怯です！」

急に身を乗り出してくる、神崎。

「いや、ここまで話したのは桜なんだが……」

「桜ちゃんのせいにするんですか!? お姉さんは許しませんよ!」

お姉さん……? いつももの言動からは考えられない発言である。

「お、おい、神崎? お前なんかおかしくないか?」

さつきから、神崎の様子がおかしい。顔がほんのり赤いし、目がトロンとしているし

……

「私がおかしい? おかしい人が何を言ってるんですか!」

神崎は俺を冷たい目で見ると、その視線と言葉は刃となり俺の心に刺さった。

泣いてもいいよな……?

それにしても、本当にどうしたのだろうか。

「あれ、この包装紙……」

桜は床に散らばっていたそれを見つけ、ひろいあげる。

「神崎先輩、ウイスキーボンボンで酔ったみたいですね……」

ということは、神崎は酔ってこんなことになっていてということなのか。どれだけ、

アルコールに弱いんだ……

「おい、桜、可憐! この酔っ払いをどうにかしてくれ!!」

「えへへえ、私は酔ってませんよお?」

その日、俺達は二度と神崎にアルコールの類のものを接種させないようにすると誓ったのであった。

初めての犠牲者

定期試験も終わり夏休み。期末テストでは、勉強会の甲斐あつてか、うちの部活生全員がどうにか赤点を回避することに成功したのであつた。

夏休み、とはいっても特にやることは無く、学校から出された課題があるとはいえ、言つてしまえば暇である。

「おはよ、兄さん」

そうは言つても、健康は早寝早起き3食食べることであり、生活リズムというのは学校がある日と大抵変わりはない。

「おはよう。今日は友達とシヨッピングだったか？」

「うん。夕飯は食べてくるね」

他愛もない会話。テレビを見ながら朝食を撮る。今日は簡単に、トーストとハムエッグである。

番組を回りしていると、気になるニュースが流れていた。

『昨夜未明、30代男性が路上で重体を負った状態で発見されました。なお、男性は体を何か鋭利な爪のようなもので数度引き裂かれており、警察は動物の仕業であると判断し

ています。しかし、この街で熊のような危険な動物は今までに発見されておらず――」

何かに引き裂かれた跡。危険な動物。そんな単語から連想されるのは、学校の裏山で見たフェンリルであった。あれを見つけてから、特にこれといった被害は出ていなかったため、放置していたが、これはまずいことになっているのではないか。

「うわ、怖……この街、そんな危険な動物いたんだ……」

熊ならまだかわいい。だが、相手はそんな生易しいものでは無い。

「みたいだな。気をつけろよ。特に、うちの学校の裏山には近づくなよ」

フェンリルが根城にしているあの裏山。あそこに近づいて、身内がやられたなどあつたら気が狂ってしまいそうである。

「兄さんの……？ どうして？」

「いや、なんとなくだ。あそこ、熊とか居そうだろう？」

つい口が滑ってしまったが、今更訂正することは出来ないだろうえ。魔物がいるから、とは言えない。適当に誤魔化す。

「確かに」

少し苦しい言い訳だったが、どうやら納得してくれたようだ。

「それじゃ、行ってきます」

桜を見送り、携帯を開き、雨と神崎にメールを送る。内容は、倉庫に集まって欲しい

ということ。どうやら、雨と神崎もニュースを見たようで、二つ返事で承諾のメールが帰ってきた。

「それで、どう思う?」

「どうもこうも、一番危険視していることが起こっている、と考えていいだろうな」

「そう、ですよね……」

フェンリルが人を襲う。これが一番危険視していたこと。今まで大人しくしていたというのに、何故このタイミングなのだろうか。

「ですが、おかしいんですよね。一応、遣いに裏山のフェンスの様子を見てきてもらったのですが、どこも壊されてはいなかったみたいなんです」

「あれは巨大ですから、乗り越えるということも可能でしょう。しかし、どうしましょう……」

フェンスを乗り越えるというのは、あの巨体であると簡単なことだろう。

それにしても実際問題、あれに勝てるというビジョンは見えない。戦車でもあれば別なのだろうが、ないものねだりだろう。

「打つ手無し、というのはこの事だな」

「せめて、この世界でも力が使えたら……」

それは、ないものねだりなのだろう。

「この世界で力がねえ……この世界は魔力が少ないんだったか？」

「正確にはマナだね。ある程度の魔法は使えないこともないんだけど、どうもマナ不足で術式が打ち消されるんだ」

魔法を使つたことがないから、よくわからないが、元勇者が言っているから正しいことなのだろう。

「魔法も宛にできないか。神崎もそんな感じなのか？」

「はい。雨さんに教えてもらった攻撃魔法はほとんど機能しませんね」

やはり、同じ現象らしい。それにしても――

「補助魔法の方はいけるんだな」

この間、雨は普通に補助魔法を使っていた。なにか違いでもあるのだろうか。

「はい。補助魔法の方は問題なく機能しているみたいです。こちらは魔法陣の解析も出てますし」

流星、中二病といったところなのか。普通そこまでするか？

「なるほどな……補助魔法で身体強化とかないのかよ？」

よくアニメとかである身体強化。それを使えば、どうにか出来るのではないかと考える。

「あるにはある。けど、それだけじゃ到底フェンリルには勝てないだろうね。強化したところで、地力が違いすぎる」

さすが、全盛期の勇者でも勝てないと言わしめただけある。補助魔法に頼るといものを、選択肢に含めるといのは難しいだろう。

「魔王なら、どうにか出来たのかな……」

「なんでそう思うんだよ」

また急な話である。

「魔王は、魔法無しで僕に勝っていたからね」

「魔王は魔法を使っていなかったんですか？」

「どうも、魔王には魔法適性がなかったらしくてね。だけど、強かったよ」

思い出に耽ける雨。だが、今はそんな話をしているときではない。

「とりあえず、俺たちに今できるのことを考えるしかない。最悪、自衛隊が出張ってくれらるだろうが……」

それで、どうなるとも思えない。

「それでも、良くて全滅だろうね。核でも落とせば別なんだろうけど」

それ、なんて言う世紀末？

「もうこんな時間か……」

「結局、成果なしですね……」

気がつくと、倉庫を照らしていた日も沈んでいた。いくつかの意見は出たが、神崎の言う通り成果なし。お手上げ状態である。

また明日、集まることにしてとりあえず今日のところは解散となった。

「涼也、こんな時に悪いんだけど……魔物の気配だよ」

帰り道、雨が申し訳なさそうに言う。別に、こんな時だろうが、察知したものは仕方が無いだろう。

「行くぞ」

現在、武器になるようなものは持つていないが何とかするしかない。武器になるようなものを携行しておいた方が良いのだろうか。

「魔物の気配が消えた……?」

もう少して現場というところで、雨の足が止まる。その顔からは困惑が見て取れる。

「そんなことあるのか?」

「うん。たまにこんなことがあるんだけど……」

どうやら、原因は不明のよう。

「もうすぐ近くだろ、消えた場所に急ぐぞ」

この場においても仕方が無い。先んず、行ってみるに越したことはないだろう。

そして、現場。その場には、巫女服を着た女性が佇んでいた。巫女服だけでも、少し異常に感じるというのに、その手には日本刀を持っている。だが、そのシルエットには見覚えがあった。

「生徒会長……?」

「む? 鈴童に風鳴か。どうしたんだ、こんな時間に」

生徒会長は刀を鞘にしまい、問う。

「それはこっちのセリフだよ。なんすか、その刀」

どこの誰が見ても、銃刀法違反に引っかかるサイズだろう。

「うむ。見られてしまったからには説明せねばなるまい」

生徒会長からのお話を簡単に要約するとこうだ。生徒会長の家は代々陰陽師（おんようじ）の家系らしい。この街では魔物（生徒会長は妖と呼んでいた）が昔からよく集まる場所であり、ここら一体の治安を守っているとのこと。

雨は何度か魔物の気配が突然消えたと言っていたが、これまでも生徒会長が退治していたのだろう。

「さて、説明はした。そちらの説明もしてもらおうぞ」

「なんのこつすか?」

現在、俺達は現場に居合わせてしまったただの一般人。言い逃れる術はいくらでもあ
るだろう。

「誤魔化そうとは思うな。ここらには人避けの結界を張っている。それなのに、ここに
お前達が居るといのはおかしな話だろう？」

生徒会長の鋭い眼差しが俺たちを貫く。

え、何その有能な結界。陰陽師つてなんでもありなんつすね。これは観念するしか
ないだろう。

「分かりました……話します」

雨は話せることは全て話した。自分か転生者であるということ、魔物を倒して回って
いるということ。そして、他にも転生者がいないかということを探しているということ
を。

「なるほどな。それで、妖を追っていたと。この世には奇妙なことがあるものだ」

「同感ですな」

「しかし、転生者というのは聞いたことがないな。力になれなくて済まないな」

やはり、転生者というのは相当稀な存在であるらしい。これから先、見つけることは
出来るのだろうか。

「別に構いませんよ。生徒会長は学校の裏山のこととは？」

「気づいている。あれは神霊の類だ。手出し無用であるし、するにしても役不足だ」

そちらの専門家にしても、強力なものらしい。これは、本当に難題である。

「やはり、そうですか……」

「ともあれ、妖については私も協力する。本来なら、注意するところだろうが、事情は分かった。放つてはおけんからな」

それは嬉しい申し出であった。現状、2人ではいつ限界が来るかわからない。生徒会長はいわゆるプロであるため、心強い。

「そういえば、お前達はいつも、放課後に集まっているようだったな。何をしているのだ？」

誰にも話していないことだったが、生徒会長は生徒の動向には敏感らしい。

「表向きにはオカルト研究っすね」

「ほう、裏では？」

「魔物退治と転生者探しといったところですよ」

「なかなか面白そうだ」

生徒会長はニヒルに笑ったのであった。

夏休み、夏祭り 「前編」

祭りに行こう。それは、倉庫を突撃訪問してきた生徒会長の発言だった。

「か、会長……？ どうしたんですか、こんな所に？」

俺と雨含め、全員で固まっていると、神崎が言葉を発する。

「うむ、事情は風鳴と鈴童から聞いてある。私もこの部活に参加するでしょう」

そういうえば、生徒会長のことを神崎に話すのを忘れていた。ジト目を向けられる。

「どういう意味でしょう……」

神崎はなにか裏があるのではないかと勘ぐっている様子である。

「なに、他意はない。ついでに、ここを学校の部活として認可しよう。顧問は……そうだな、特別顧問を招いているということのでつちあげれば何とかなるだろう」

「そのメリットは……？」

そう。わざわざ部活と認定されなくても今まで活動してきている。今更、部活動と認可されたところで、メリットもないだろう。

「部費が出るぞ？」

「え？」

会長のどや顔に素っ頓狂な声を上げる神崎。これは完全に予想外であった。

「この部はオカルト研究部だ。部費でオカルトの類を集めることも可能だろう。ここら一体の言い伝えなんかも集めやすくなるだろう、というのは表向きだ」

表向き、というのなら裏に何かあるのだろう。会長は続ける。

「それなりの金が入るのならば、妖と戦うための武器になるようなものを仕入れることが出来る。部費の使用状況については明細を書かなければならないが、その辺は私がんとかしよう」

会長がやってくれるとあれば話は早いだろう。もはや言うことはあるまい。

「で、ですが、この部は危険なんですよ!?!」

しかし、神崎はどこか気に入らないらしく、首を縦に振ろうとはしない。自分の聖地（中二病の）が侵されるとでも思っているのだろう。

「案ずるな、私はこれでも巫女だ。自分の身は自分で守れるさ」

結局、神崎は折れました。

祭り当日。集合場所にはまだ俺と雨しか集まっていなかった。

「祭りか……」

川辺での祭り。ここら辺の地域ではとても大きな祭りである。しかし、ここ数年は行っていないかった。最後に祭りに行ったのはいつだっただろうか。

「昔は結構3人で行ったよね」

懐かしむ雨。

「最近も桜も友達と行くようになったし、俺ら二人で行くつてのもって感じだし、恋愛なんて来なかったしな」

俺も雨も彼女を作ったことがないから、桜の面倒を見なくて良くなった時期から祭りに来ることなんてなかった。

「涼也のそういう話は聞かないね。興味が無いのかい？」

「別に興味が無いって訳でもないが……」

俺に近寄ろうとする女子なんて、数える程もいなかった。目つきのせいなのか、性格のせいなのかは分からない。そこまで悪くは無いと思うんだけどな。

そんな話をしていると、リムジンが俺たちの前に止まる。

「お待たせしました」

その中から出てきたのは、浴衣を着た、神崎と可憐であった。

お金持ちですごい……リムジンなんて初めて見た。

「可憐、どうしたんだよ？」

「べ、べつになんでもないです」

可憐は神崎の後ろに隠れて出てこない。

「ほら、恥ずかしがってないで」

神崎に押される形の前に出てくる神崎は、顔をほんのり赤くしながら出てくる。

「どうですか？ 可憐ちゃんに似合ってるような浴衣を選んだのですが」

「いいんじゃないか？ 似合ってるぞ」

今日は包帯はしていないようだが、眼帯はしているようだった。しかし、黄色の浴衣はとても似合っていた。

「私には無いんですか？」

桃色の浴衣を着ている神崎。確かに似合ってはいる。いるのだが……可憐の時はなんともなかったのだが、意識をするととても恥ずかしくなる。

「へーへー、似合ってる似合ってる」

「なんか適当ですね……なんか、自身無くなっちゃいます……」

適当に流すと、神崎はしよげてしまった。

「そんなことは無いですよ。お二人共、とてもお似合いです」

「ありがとうございます。やっぱり、雨さんは涼也さんとは違いますね」

これか、イケメンとのクオリティの違いと言うやつなのだろう。

「皆、揃っているようだな」

そうこうしていると、藍色の浴衣を着た生徒会長も合流。これで全員である。

「可憐、どうしたんだよ。今日はやけに静かじゃないか」

先程から上の空の可憐。一体どうしたというのだろうか。

「べ、別になんでもないですよ!？」

「それなら別にいいんだけど」

いつもの中二病は何処へやら。どうやら、今日は普通モードでいくらしい。包帯がキーなのだろうか。そのへんはよく分からないけど……

それから、会長に振り回された。やれの屋に行こう、やれ屋台に行こうと言いつ放しであり、俺達はそれに付き合わされる羽目になっていたのであった。

「あれ、可憐はどこだ？」

引きずり回されている間、気がつくくと、可憐がいなくなっていた。

「ついさつきまではいたはずなんだけど……」

所謂、迷子と言うやつだろうか。高校生が迷子ってどういうことなのだろうか。

「つたく、ちよつと探してくる。みんなは適当に遊んでてくれ」

「僕も探すよ」

「いや、さすがに神崎と会長を2人にするのはまずいだろ。お前は2人と居てくれ」

2人は目立つ。そんなふたりをふたりきりにするというのは、ナンパしてくださいと言っているようなものだろう。その点、雨がいてくれるのならば、大丈夫だろう。

可憐は割と早い段階で見つかった。そして、おまけも一緒に。おまけ、というのはどう見てもヤンキーな男が2名ほど。可憐はナンパされていた。外野から見ているのも面白いが、可憐からは、困惑の表情が見て取れた。さすがに、見ている訳にもいかない。「すみません。そいつ、俺の連れなんです」

特に喧嘩腰になる必要は無い。ここは丁寧に行こう。

「あ？ わりいな、そんなじゃ少し借りるわ。返さねえけど」

男達は汚い笑い声をあげる。殴りたいこの笑顔というのは、このことなのだろう。

「可憐、行くぞ」

「あ、先輩……」

可憐の手を引き、その場から去る。だが、男がそれを許すはずもなく――

「無視すんじやねえよ！ あ、てめえ！」

追いかけてきたのだが、この祭りの人だからそれを阻止してくれたようであった。

「あんな奴ら、ボコボコにしてしまえばよかったのに」

可憐は口をとがらせる。

「案外過激だなお前……別にそこまでする必要は無いだろうよ」

暴力に訴えるという手もあるにはあるが、あんな下衆を殴る拳を俺は持ち合わせていない。拳は殴るためだけのものではない、手を取り合うものなのだ。

「しかし、可憐。迷子は小学生までぞ」

「すみません……あのその、先輩……手……」

男達から逃げてから、今までの間、俺は可憐の手を握ったままだった。

「すまんが我慢してくれ。また迷子になれる訳にもいかん」

また迷子になられたらたまったものじゃない。手を離したら、またふらーつとどこかへ行ってしまいそうだ。昔、桜の手を引いて祭りを回っていたことを思い出す。

「先輩は私を小学生か何かと勘違いしていませんか……？」

「気のせいだろ」

思いつきりバレてました。

「それじゃ、しっかり握っててくださいね」

「おう」

どうやら、諦めてくれたらしい。その顔が赤く見えたのは、おそらく夕日のせいだろう。

雨たちのもとに戻る最中、俺達の行く手を人だかりが阻む。

「さすがに多すぎだろ……気をつけろよ？」

「はい、分かっています——きやつ!？」

人につつかり、倒れそうになる彼女を支える。こういう時こそ、手を引いてよかつたと思う。

「可憐、大丈夫か？ 危ねえな……」

「すみません、先輩……あれ……?」

可憐の顔からは、先程までついていた眼帯が無くなっていた。その瞳を俺は初めて見た。

「お前……: 「ごめんなさい……!」 あ、可憐っ!」

彼女は俺の手を振りほどき、人混みの中へと消えていった。

一瞬だけ放心するが、直ぐに我に返る。

「可憐のあの眼……」

虹彩異色症。所謂、オッドアイだったのだ。いつも装着しているあの眼帯はオッドアイを隠すものだったということか。

「それにしても、何故……」

何故、あいつは泣いていたのだ……？

可憐は俺から逃げる時、涙を零していた。オッドアイなんて、中二病からしてみたら憧れのようなものだろう。一瞬、カラーコンタクトかと思ったが、可憐のあの様子を見ると違うのだろう。となると、見られなくなかったというのが、1番に思いつくことである。

分からない。なぜ、可憐があんなことになってしまったのか。俺は、気の利いた事なんて言えないから、こういう時は放って置くのが1番なのだろう。だけど、このまま可憐を1人しておくというのは、ダメな気がした。

この前の可憐からの質問。

『私らしいってなんですかね……』

なぜか、その質問がこの件に関係している気がしてならなかった。

「あの馬鹿……すっかり問いつめてやるからな……」

可憐が逃げた方向へと走ったのであった。